Ange Vierge～The Wings Tail～

のわわーる

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日突如として４つの世界で発生した異変、世界接続―ワールドコネクト―

それを境に各世界の少女が発現した異能力、異能―エクシード―

異能を得た少女達―プログレス―は「青蘭学園」に集い、来たる終焉―世界崩壊―を防ぐため日々修練に励む

これは一人のプログレスと、それを支える存在―αドライバー―との、”翼の物語”

―

初投稿になります、のわーると申すものです。
この小説はＳＥＧＡ様より配信中のアプリ「アンジュ・ヴィエルジュ〜ガールズバトル〜」の基になった、(今は亡き) ＴＣＧ「Ａｎｇｅ　Ｖｉｅｒｇｅ」及びアニメ版「アンジュ・ヴィエルジュ」の物語を基礎に置いたものとなっております。
細かな設定は作中でもある程度補完するつもりではありますが、原作アプリのＨＰを見ていただけると更に楽しめる内容となっております。
また、特定のプログレスをメインに据えたストーリーの為、オリジナルの男性キャラが何人か登場します。
女の子同士でキャッキャウフフするお話を期待されてる方にはそれに副わない物となってしまう可能性がございます、それをご了承の上お読みください。
見切り発車の為いつまでモチベーションが続くかは分かりませんが、感想などございましたら頂けるとモチベ維持に繋がるので是非よろしくお願いします(何様)。
Ｔｗｉｔｔｅｒもやっているのでそちらでも大丈夫です。

前置きが長くなってしまいました、よろしくお願いします。

ＴｗｉｔｔｅｒＩＤ　＠ｎｏｉｒｒｅｄｒｏｏｔ

目次

出会い ―― 1
天使の涙 ―― 7
ブルーミングバトル ―― 20
誓い ―― 32
信じること ―― 42
陽だまりの中で ―― 52
黒魔女 ―― 66
自分らしさ ―― 76
死神の鎌 ―― 88
死を招く者 ―― 96
対峙 ―― 105

出会い

——空に憧れていた。
空は何処までも続いている、自由な世界だ。
ちっぽけで無力な自分でも空を翔べば何かが変わる、そう信じていた。
——あぁ、きっといつか、あの空の向こうに——
——
「はぁぁぁ……」
体に疲れを覚え、思わずため息をこぼす。時刻は午後４時。今日の授業を全てこなし、ホームルームを終えた直後の事であった。今日は一段とハードな授業が多かった、などと疲れで回らない頭にはそんな備忘録じみた物が浮かぶ。
「よっ、今日もお疲れさん」
そんな折、心を許せる数少ない友人の一人が軽い調子で声をかけてきた。
「あぁ、お疲れさん。……お前は随分と元気そうだな」
「お前さんと違って鍛えてるからな」
そう言って目の前の友人、〝国後宗悟〟は軽く自分の腹筋を叩く。実際どの程度鍛え

ているのかは知らないが、少なくとも自分より体力があるのは間違いないだろう。
「お前も少しは体力つけたらどうだ、節成さんよ？　ただでさえハードな授業があるんだし」
「そうだな、考えとく」
そうして彼、〟日向節成〟は友人の助言をほんわかとあしらい、下校の支度を進める。
窓から見える空の遠く、太陽が沈もうとしていた。

――

〟青蘭学園〟。名前の通り学校法人の施設であると思われがちだが、実のところはその域を超えている。〟青蘭島〟と名付けられた人工島に建てられたこの学園に通う生徒は、一人の例外なく〟異能力〟を宿しているのだ。総じて〟エクシード〟と呼ばれるそれは突如として発現した。ある日、４つの世界が上空に浮かぶ門、〟ハイロゥ〟によって繋がったのだ。
黒の世界〟ダークネス・エンブレイズ〟。
赤の世界〟テラ・ルビリ・アウロラ〟。
白の世界〟Ｓ＝Ｗ＝Ｅ―システム・ホワイトエグマ―〟。
そして青の世界〟地球〟。
この〟世界接続―ワールドコネクト―〟と呼ばれる現象を折に、学生を中心とする世

代がエクシードに目覚めていく事となった。
　何故そのような現象が起こったのか、何故異能力が宿るようになったのか、何故異能力は少年少女にのみ宿ったのか。それは現段階においても議論の余地を出ない。
　その一方でこんな噂が学園内で囁かれている。

―世界接続で繋がった４つの世界はいずれ互いを引き合い、衝突し、崩壊する―

――

　時刻は１７時を回っている。季節は春、日が長くなっているとはいうものの、雨雲が近づいているのか、辺りは薄暗くなっていた。
―何だかんだこんな時間になるまで学校に残ってしまった。
　俺は自分の行動に後悔していた。ひと月前に青蘭学園に”強制入学”させられ、一人でそそくさと帰るのがいつもの事になっていたのに、いつの間にか学校生活になじんでしまっている。それもあの”日向美海”とかいう生徒のせいだ。初対面なのにやたら馴れ馴れしく接してくるし、やたらトラブルを起こす。そいつがプリントを丁度目の前で散らかしてくれたおかげでそれをを手伝う羽目になった。
「まあ、何だかんだ手伝っちまった俺も俺でお人よしか……」

そんな独り言が口から出た。食材が切れてたから今日は商店街に寄ってから寮に帰ろう。
ここひと月の基本ルーチンをこなすため、節成は商店街へと足を進めた。

――――

―おいおい、今日はまとまった雨は降らないんじゃなかったのか？
買い物を終え、折り畳み式の傘を差しながら商店街を歩く。”今日の天気は晴れのち曇り、所によっては小雨がぱらつくでしょう!”なんてテレビで自慢げに言っていたが結果ははずれ、残念なことに本降りの雨が降っている。雨は何となく憂鬱になるから嫌いだ。そんなことを考えながら、三日分の食材が入ったレジ袋を手に下げ、商店街の喧騒の中を歩く。放課後の時間な事もあり、学園の制服を来た連中が沢山いる。大抵そいつらは複数でまとまって行動してて、クレープを手に取って食べていたり、雨の中傘も差さずに肩を組んでいたり、カップルなのだろうか、相合傘なんて事をしてる奴もいる。
―とにかく、あまり長居はせずにさっさと寮に帰ろう
そうして帰路に付こうとしたとき、不意に商店街には不釣り合いな音が聞こえてきた。誰かが泣いている…そんな音、いや…声だ。
常々思うのだが、俺はトラブルに巻き込まれやすい体質なんだろうか。実際には自分からトラブルに首を突っ込んでいっているような気もしないでもないが、それはあくま

で結果論だ。誰かが困ってるならそれを見過ごすことは出来ない…相当変な事でない限り。

そんなお人よしな少年はすすり泣く声のする方向へ足を運ぶ。その場に自分の人生を大きく変える事となる者がいるとも知らずに。

――

目の前に〟天使〟が居た。例えではなく、文字通りの〟天使〟だ。背中からは純白の翼が覗き、地球の人間とはかけ離れた容姿と服装をしている。只、眼前の天使には地球で一般的に語られる天使とは異なる点が一つだけある。

―片翼の……天使？

……翼が片方無かった。それが原因で泣いているのか、または別の原因があるのか。

そんな事を浮かべ、どう対処したら良いか必死に思考していた節成の脳に儚く崩れそうな声が響く。

「ぁ……なた……は？」

それが俺の――レミエルとの出会いだった

Ａｃｔ．１　出会い

天使の涙

「ぁ……なた……は？」
　目の前で体育座りの様な姿勢でたたずんでいる片翼の天使がその瞳をこちらに向ける。雨の降る薄暗い路地で、節成はただ戸惑う事しかしかできなかった。誰かがすすり泣く声が聞こえたからと足を運んだ結果がこれである。いつもなら困っている人から理由を聞き、それを手助けするのが節成の無意識の常である。しかしあまりにも非日常的なこの場面に、節成は対応できないでいた。
「ぇと……君は？」
　とにかく会話を作ろうと口から出たその言葉はあまりにも不適切なものだった。質問に質問を返す形になってしまい、結果的に自分も目の前の天使も困惑するのみだ。
「あぁ、そうじゃなくて。俺は日向節成だ。青蘭学園の一年」
　節成は即座に自分の発言を訂正し、今度は正確に自分の事を伝えた。敵意はない。怯えている様に見える目の前の天使がそう理解できるように、可能な限り穏やかな口調で。
「誰かが泣く声が聞こえたんだけど、君がそうなのか？」

　とりあえず現状の確認にと率直な質問を投げかけてみたものの、天使は俯くばかりで口を開こうとはしない。ただ怯えているというよりは、心を閉ざしているかのように節成は感じた。相手の言葉が耳に届く前に全て遮るような、失意に満ちた心。この様な相手と関わるのが初めてである節成は決め手を欠いていた。

「な、何で泣いているんだ?」

　相手の気持ちが分からないのでは話にならない。とにかく質問を投げかける節成であったが、天使の反応は変わらず、口を閉ざしたままである。

「えっと、その片方しかない翼が何か関係してたり――」

　今得られている情報から率直な推察を述べた節成の言葉を遮る形で不意に天使が口を開き、先に耳にした物とは違う、小さくて喧騒にかき消されそうな失望に満ちた声を節成に向けた。

「私に……構わないでください」

――

　何もできなかった。結果としてほんの少しの施しを半ば無理やり押し付ける形で、逃げ帰ると形容しても良いような足取りで寮の部屋に戻った節成は、酷く疲れていた。他

人からも「お人よし」と言われ、数多くの人助けを経験した節成にとって先ほどの出来事はあまりにもイレギュラーだった。ただ力になれなかったからではない。外界の全てを拒絶するかのような失意に満ちた眼差しを目の前にして、何もできなかった自分が悔しい。何が彼女をそのようにしてしまったのか。どうすればあの場で彼女に手を差し伸べてやれたのか。そんな疑問とも反省とも言えないような感情が頭の中で泡沫のように浮かんでは消えていく。

日課となっていた自炊の為の調理もする気になれず、節成はベッドに横たわったまま意識を睡魔に委ねた。それはいつもの物とは違い、酷く不快なものとなっていた。

――――

降りしきる雨が冷たい。さっき目の前で必死に自分に語り掛けていた男が去ってから少し経ち、片翼の天使――レミエルはその場から動けずにいた。何故泣いているのかと聞かれたが、自分でも分からない。ただ心の中で黒い感情が渦を巻くような、そんな感覚がとても不快な物だという事だけは分かる。只それに抗えないでいた。

自分の翼について聞かれた瞬間、この人も自分の事をそうやって虐げるのか、と瞬間的に思い、つい遠ざけてしまった。片翼の翼――天使にとっての象徴であり、誇りでもある翼が片方欠けている、それだけの理由で酷い扱いを受けてきた。迫害、嘲り、罵声――あらゆる事で虐げられた。自分を認めてくれるのは、以前仕えていた大天使様だ

け。他に自分を見てくれる人なんていない、そう思い込んでいた。
そういえばあの人、何か置いていったんだっけ。と先ほどの男が押し付けるような形で置いていったものを思い出す。目の前の足元にはタオルの様なものが綺麗にたたまれて置かれていた。これで体を拭けという事なんだろうか、そんな事を考えながらタオルに手を伸ばし、それを持ち上げる。するとその中から四角く平べったい物が落ちてきた。何かと思い、それを拾い上げる。どうやら包み紙の様なもので覆われているらしい。包み紙の様なものを剥し中の物を露わにすると、ほのかに甘い香りが漂ってきた。食べ物だ、と理解し、レミエルはその怪しい食べ物を恐る恐る口に運ぶ。そしてそれを口にした瞬間、驚くほど甘くて魅力的な香りが口の中に広がり、レミエルの鼻腔をくすぐった。こんな食べ物を食べるのは初めてだ。そのあまりの美味しさにレミエルは両手で持ったそれを一気にかみ砕き、頬張った。口の中が甘い味で満たされる。今まで感じたことのない幸せな気持ちがレミエルの心に宿り始めていた。
レミエルが初めて好感的な態度を取る人から受け取った物。それのあまりの素晴らしさ。彼女が流す涙は、失意の物から救済の喜びといった感情の物にいつの間にか変わっていた。

――

夢を見た。顔も知らない誰かが助けを求めている。手を伸ばそうにもその手が動か

ないし、酷く眩暈がする。振り向くとそこにはかの日の天使がいる。そして最後には決まってこう言うのだ。

「私に……構わないでください」

飛び上がるように目を覚ますと、目の前には物珍しそうにこちらを見ている友人、宗悟の姿があった。どうやら朝のホームルーム前に机でひと眠りしてしまったらしい。

「随分珍しいじゃないの、節成さんよ。居眠りなんて」

「……そうだな、自分でもそう思う」

あの出来事から五日が経っていた。あれ以来、寝るときには決まってあの天使が出てくる夢を見るようになった。忘れようと自分に言い聞かせているものの、まるで心がそれを許さないように。

「ほんと、自分でもどうかしてると思う」

「何の話だ?」

何の遠慮もなく首を突っ込んでくる、ある意味無作法なこの友人にだけはここ最近の自分の事を打ち明けようかと心に思ったタイミングで、教室にドアが開く音が響いた。それに続いてカツカツとけたたましい靴の音が聞こえてくる。

「朝のホームルームを始めるぞ。全員いるな?」

いつもの決まった第一声を放ちながら、教室を狐の様な目で見渡す教師の名は〝神通冬木〟。クラスの連中の一部からは、陰から「雪女」などと恐怖されてはいるがやはり教師なのだろう、生徒の面倒見は良い。

「よろしい。今日は皆に紹介する人がいる。隠さず言うが、新入生だ」

「新入生」という言葉に教室がざわつく。青蘭学園は異能を宿した人物を時期に関係なく随時受け入れている都合上、時期外れの転校生や新入生などという話も珍しくはない。しかしそれに関係なく、クラスに新しい仲間が増えるともあり教室中の生徒からは期待の声が次々と上がっている。

「静かにしろ！煩いままだと新入生が入ってこれないだろうが！」

冬木の一喝で教室が一瞬にして凍ったかのように静まり返る。これが冬木が「雪女」と呼ばれる所以だ。その鋭い眼差しと棘のある言葉を前にすれば、熊でさえ凍りつく――らしい。

「まあいい、入れ」

冬木の言葉に続いて教室のドアが開く。そこから小柄な少女が金色がかった長い髪を揺らしながら入ってくる。クラスの生徒たちからは先ほどとは異なる、驚嘆が混じったどよめきが上がった。その少女の背には、翼があった。――片方だけの翼が。それを目にした節成は言葉を失う。かの日の天使が、再び目の前に姿を現したのだ。冬木に自

己紹介を促され、金色の髪の天使が口を開く。そこから、弱弱しくはあるが五日前とは違い、澄んだ声が放たれた。

「れ、レミエルと申します。赤の世界〟テラ・ルビリ・アウロラ〟から来ました。よ……よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げる〟レミエル〟と名乗る天使を歓迎するかのように教室中から拍手が巻き起こる。それに驚いたのか、下げた頭をまるでスローで逆再生するかのように上げたレミエルの目尻には、何故か涙が浮かんでいた。

「よし、レミエルはとりあえず空いている席に座れ」

冬木に促され、レミエルはひと月前から空席だった席へと向かう。それはあろうことか、節成の隣の席だった。こちらに向かってくるレミエル。節成は激しい動機に駆られていた。あの日、ろくに手を差し伸べられなかった相手にどんな顔をして接すればいいのか、頭が混乱する。隣の席にレミエルが座る。心臓の鼓動がより激しくなっていよいよ堪えるのも限界かと思われたその時、不意にレミエルが節成に向けて言葉を放った。

「その……あの時はごめんなさい」

思いがけないその言葉に、節成の心は大きく揺れ動いた。

――

授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。午前最後の授業を終え多くの生徒たちが食

堂へと向かう昼休み、節成と宗悟は机を囲み自前の弁当を開いていた。
「節成お前、アレはどういうことだよ」
　唐突に宗悟が口を開く。何のことか一瞬分からなかったが、恐らく朝の出来事の件だろう。レミエルがこっそり告げた節成への言葉を、節成の後ろの席に座っていた宗悟が聞き逃す道理はなかった。
「えっと、その、話すと長くなるんだが――」
　観念して五日前の出来事を宗悟に打ち明ける。レミエルと出会っていたこと、その時に手を差し伸べてやれなかったこと、それを酷く後悔していたこと。その話を聞いた宗悟は、合点がいったというような表情を浮かべた。
「なぁるほどね、それで今朝あんな顔してたわけだ」
　なるべく学園内では表に出さないよう心がけてはいたものの、うっかり出てしまった今朝の節成のやるせない表情を理解した宗悟は、スッキリしたような表情で節成の肩をたたく。
「そんなに悩んでたんなら、相談してくれりゃよかったのによ。俺はお前の友達なんだぜ？」
　宗悟の優しい言葉に、節成は自分を酷く恥じた。自分にはこんなにも頼れる友がいたのではないか、と改めて実感した。

「そうだな、悪かったよ」
「そういう時はありがとう、だろ?」
確かにその通りだ。励ましに対して謝罪をしてはどうしようもない。節成はこの頼れる友人に対して、これまで以上に深い友情を感じていた。その時不意に後ろから、今朝も聞いた澄んだ声が聞こえてきた。
「あ、あのぅ」
振り返ると、そこには申し訳なさそうな表情をしたレミエルが立っていた。その手には学園の近くにあるコンビニのレジ袋が下げられている。
「その……お昼ご飯、一緒に頂いてもいいでしょうか」
恐る恐るといった感じで放たれたレミエルのその言葉に、顔を見合わせた節成と宗悟。それに対する返答は、彼らにとって考えるまでもない事であった。

――

「じゃあレミエルちゃんは本当に赤の世界の天使なんだ」
宗悟が感嘆の声を上げる。レミエルの自己紹介を改めて聞いた節成と宗悟であったが、宗悟は自分たちの住む世界とは別の世界の住人を目の当たりにして驚きを隠せないでいた。
赤の世界〝テラ・ルビリ・アウロラ〟。橙色の空と金色の海が大地を覆う世界。そこ

には普通の人間と共に、女神やそれに使える天使、妖精といったものがごく当たり前のように存在している。女神達は人々の信仰を力に変え、奇跡とも呼べる力を以て世界を統治していた。
レミエルが口にする、〝青の世界〟地球〟とは全く異なる世界の構造に、節成も改めて感嘆の声を漏らした。
「他にも黒の世界と白の世界っていうのがあるんだよな？」
「お前、本当に青蘭学園の生徒か？」
宗悟の初歩的な質問に節成は呆れたような顔をする。
〝黒の世界〟ダークネス・エンブレイズ〟。常闇が支配するその世界には常に赤い月が浮かび、決して日が昇ることはないのだという。世界は魔女王によって支配されており、悪魔、吸血鬼などといったホラー映画の登場人物の様な存在が跋扈しているらしい。
〝白の世界〟S＝W＝E〟。読みは〝システム・ホワイト・エグマ〟というらしく、世界の全てが機械の人工知能によって管理されている。その科学力は青の世界を遥かに凌駕し、人間と比較しても全く遜色のないアンドロイド達が日常生活に浸透しているといった、驚くべき世界だ。
そんな世界が〝ハイロゥ〟で青の世界――正確には青蘭島上空と繋がっていて、それぞれの世界の住人が日常的に出入りしている。それがこの青蘭学園の常識であった。

そんな世界の構図もあり、青蘭学園には各世界のさまざまな外見をもった生徒が入り混じっている。生徒のクラス分配も各世界の交流を名目に、偏ったものはなるべく避けているらしい。しかし、なぜか節成たちのクラスは青の世界の生徒が大半を占めており、必ずしもその限りではないことをうかがわせる。そんな初歩的な知識を宗悟に叩き込んでいたところ、彼はそれに嫌気がさしたのか急に話を遮り、話題を切り替えてきた。

「ところで節成さんよ、レミエルちゃんに何か言う事はないのかね？」

宗悟の言葉にギョッとした節成は一瞬言葉を失う。

「い、いきなり何だよ」

「いきなりじゃないだろ？聞くところによると節成さんはレミエルちゃんに何か負い目を感じていらっしゃるらしいじゃないの、ええ？」

宗悟はまるで嫌がらせのようにわざとらしく節成の傷を抉ってくる。宗悟の急な態度の変化にレミエルはきょとんとした顔をこちらに向けている。休み時間に知識を無理やり詰め込まれたことに対する彼なりの反撃なのだろう。節成は数時間前に感じた友情を三割ほど撤回しつつも、わざわざ否定することでもないと感じ、宗悟の言葉の通りレミエルに向けて口を開いた。

「――その、レミエル。あの時はすまなかった」

「すまなかった、って……」

レミエルは節成の急な謝罪に疑問符を浮かべる。節成はこれからレミエルが自分に対してぶつける言葉の全てを受け止める覚悟を以てレミエルにそう言ったが、しかしレミエルは首を横に振り、その後発した言葉は節成の予想を裏切るものであった。
「私こそ、貴方にごめんなさいって伝えなきゃいけないって思ってました。あの時私に手を差し伸べてくれた貴方を、私は突き放してしまった。だから――」
レミエルが予想外の反応を見せたため、節成には返す言葉がなかった。
「私、片方しか翼が無いから、みんなから落ちこぼれだって言われてきたんです。だからあの時、貴方も同じように私を傷つけるんじゃないかって、思ってしまったんです」
レミエルの真意を知った節成は、今までの自分の考えが間違いだったのだと悟った。自分は手を差し伸べられたんじゃない、そう思い込んでいただけなのだ。自分の心の重石が消えていくのを節成は感じていた。
「あの時貴方がくれた〝ちょこれいと〟、凄く美味しかったです。その……ありがとうございました」
その言葉を受けた節成の心は、この〝空白〟の五日間の物とは違っていた。自分のしたことは間違いではなかった。しっかりと彼女の心に届いていたのだ。――あぁ、これで報われた。節成は大きく脱力し、ようやく言葉を口にすることができた。
「――俺の、勘違いだったんだな」

その言葉は宗悟にも、レミエルにも聞こえないほど小さいものであった。

――

教室に生徒たちの声が再び響いてくる。昼休みの時間が終わろうとしていた。朝と同じように、けたたましい靴の音が聞こえてくる。午後の授業の開始を知らせるチャイムが鳴るより前に教室のドアが開き、冬木が教室に姿を見せた。そのまま教壇の上に立ち、やはり朝と同じように凛とした声で告げる。

「全員揃っているな！ 今日の午後の授業だが、予定を変更して〝ブルーミングバトル〟の実技演習とする！」

〝ブルーミングバトル〟――。青蘭学園が、その姿の鱗片を見せようとしていた。

Act．2　天使の涙

ブルーミングバトル

「今日の午後の授業だが、予定を変更して〝ブルーミングバトル〟の実技演習とする！」
冬木のその言葉に教室全体が沸き上がった。
〝ブルーミングバトル〟。青蘭学園にのみ存在する特別なカリキュラムである。学園の一部で噂されている〝世界崩壊〟という事象だが、青蘭学園上層部ではそれが将来起こりうる事象とされ、観測を常時行うなど重大な事態とみている。それには異能を宿した存在が必要不可欠だとし、いざというときに戦えるように彼らに戦闘訓練を施している。それこそが〝ブルーミングバトル〟だ。また、ブルーミングバトルでの勝敗がこの学園でのカーストを形成しており、ブルーミングバトルで強いという事がこの学園でのステータスになるのだ。
「新入生が加わったことによりこのクラスの人数が偶数になり、ようやく実技演習を行う事が出来る。今まで出来なかったことが不思議なくらいだ」
レミエルがクラスに加わったため節成らのクラスの人数は丁度三十人となり、二人一組で行うブルーミングバトルが行える環境となったらしい。教室中が気合や未体験の事象への期待の声で沸き立つ中、節成と宗悟もまた同じ感情を持ち合わせていた。

「そうか、漸くだな節成！やっと俺の鍛えた体が役に立つときが来たんだな！」
「そんな訳ないだろ。俺たちは〝αドライバー〟だから後方支援役だ」
生徒たちの宿した異能力には、男女で差異がある。女性に宿った異能は、身体強化や所謂魔法の様な物、事象を操る力など、戦闘を担う面で有利な物が多い。そのため、ブルーミングバトルでは彼女らが前線に立ち、戦うことになる。学園では彼女らを〝プログレス〟と呼称し、他の異能を持たない存在と区別している。それに対して男性には、プログレスをサポートする異能が宿った。〝αフィールド〟を展開することによってプログレスと〝リンク〟し、彼女らの能力を底上げすることでより戦い易い状態にするのだ。彼らはプログレスとは別に〝αドライバー〟と呼称される。〝プログレス〟と〝αドライバー〟が一組になる事で初めてブルーミングバトルをする条件が揃うのだ。
余談だが、この男女差が影響してか学園内では女子生徒の方が男子生徒よりも立場が上となっているらしい。
「レミエルはブルーミングバトルは初めてなんだよな？」
節成は彼らと昼食を共にしていた天使、レミエルに尋ねるが、返事は帰ってこない。どうしたものかとレミエルの顔を覗いた節成は、その表情に驚愕する。周りが期待の眼差しを向けているブルーミングバトルに対して、明らかな恐怖を抱いた表情を、レミエルはしていた。

――

教室を出てグラウンドの特設スペースに集まった節成ら1―Bクラスの面々は、冬木の指示の元でプログレスとαドライバーによるペアを組んでいた。その中で節成はレミエルに話しかける。

「なあレミエル。君は、戦いが怖いのか？」

それに対しレミエルは心ここにあらずといった表情を節成に向け、今度はしっかりと問いに答えた。

「怖くないわけないです、戦いは怖いものですから。でも、それ以上に――」

と、途中まで言葉を発していたレミエルの口が唐突に固く閉ざされる。これ以上話すと何か、具体的には分からないが何か良くない事柄に触れてしまう気がした節成は慌ててレミエルをなだめた。

「それ以上言いたくないなら、言わなくても大丈夫だ。」

レミエルを気遣って出した話題であったが、かえって不安にさせてしまったのではないかと、節成は感じた。相変わらずレミエルの表情は曇っている。少しでも不安を取り除いてあげる為に必要な事、それは。

「そんなに不安なら、俺がついてやる。それなら少しは安心だろ？」

――自分がレミエルと組む。宗悟は既に別のペアを探しに行ってしまったし、彼以外

の見知らぬ誰かとペアになるよりは顔見知りの自分がパートナーの方が幾分かマシだろう、というのが名目だ。その提案を切り出されたレミエルは少し考えた後に、小さな声で答えた。その表情は先ほどよりは少しだけだが晴れやかになっている気がした。

「その、よろしくお願いします」

そして、節成とレミエルがペアを結成した瞬間を見届けたのか、冬木が待ってましたとばかりに声を上げた。

「全員パートナーができたな！では早速始めるぞ！」

彼らにとって初めてとなるブルーミングバトル、その火ぶたが切って落とされようとしていた。

——

学園生活で初となるブルーミングバトルに、宗悟は胸を躍らせていた。元々何の才能もなかった自分に異能が宿り、青蘭学園に進学することとなった宗悟は、このブルーミングバトルというカリキュラムに対して人一倍強い関心を抱いていた。何のとりえもなかった自分が輝けるやも知れない、そう思うだけで俄然思いは強くなった。そして遂にその瞬間がやってくるのだ。正直、持っている知識以上の事は何も分からない。だがやるからにはとにかくがむしゃらにやるしかない。

「国後君、ちょっと力入りすぎてるんじゃやない？」

今回のバトルのパートナーとなる生徒が駆け寄ってくる。短髪で、見るからに体育会系と見える活発そうな生徒。彼女は〝土屋原はねる〟。陸上部に所属している、学園屈指のスプリンターだ。その性格は男子勝りといったもので、女子生徒にも一定数のファンがいるとのことだ。同じ運動部で少し面識があるという事もあってすんなりとパートナーとなってくれたのだ。
「そうか？俺はいつも通りだぜ」
実は図星で、これから始まる試合に対する感情が昂っていたのだが、少し意地を張ってしまった。
「そう、ならいいんだ。そろそろ始まるから、頑張ろうね」
そう言ってバトルコートに戻るはねる。その視線の先にはこの試合の相手となる生徒が立っていた。眼鏡をかけて、ブロンズの髪を風に揺らす生徒、〝ユリア・ロマノフスカヤ〟。ロシアからの留学生で、あまり男子とは絡んでいないようだ。その出で立ちは不思議なもので、それだけで絵画になってしまいそうなものであった。
「両チーム、準備はいいな！」
冬木が両チームに呼びかける。いよいよ試合が始まろうとしていた。バトルコートに立つプログレス二人、それをサポートするためにコート外で構えているαドライバー二人、それを固唾を飲んで見守るクラスメイト二十六人。コートを包む空気には、緊張

が走っていた。
「ユリア、行っておくけど僕は手加減なんかしないからね！」
「そう？ なら私もそれに答えないとね」
ロシア人ながら流ちょうな日本語を話すユリア。留学の為、本国で沢山勉強したのだという。そんな二人の間には気さくな会話とは釣り合わない、一触即発の空気が流れていた。そして、その瞬間は訪れた。
「ブルーミングバトル、スタート！」
試合の開始を告げる掛け声とともに宗悟は全神経を集中させ、はねるの精神と己のそれを同調させる。
「αフィールド展開！ エクシード、リンク！」
αドライバーはプログレスと精神を〝シンクロ〟させることで、プログレスの基礎能力を強化すると同時に潜在的な能力を更に引き延ばす事ができる。この強化の度合いは、リンクする二人の〝シンクロレベル〟に応じて変化する。リンクによって身体を強化されたはねるは大きく息を吐き出し、突撃の構えを取った。
「――いくよッ！」
はねるが地面を蹴り、一気にユリヤへと突撃する。はねるのエクシードは〝身体強化〟。身体の強化はプログレスに元から備わっている基本的な物であるが、はねるはそれ

を更に数ランク昇華させたものを己のエクシードとしていた。彼女らには試合に臨む際に宗悟とあらかじめに立てておいた作戦があった。速さに物を言わせて翻弄することでチャンスを作る、という物だ。作戦通り猛烈な速度でユリヤに迫るはねるだったが、ユリヤはそれをものともせず、空に掌をかざす。

「氷よ!・」

ユリヤの掌の先から巨大な氷塊が突如として出現し、はねるの進路を塞いだ。それを回避するために氷塊の直前で大きく横にステップを踏むはねる。ユリヤのエクシードは"氷を操る能力"。何もない場所でも氷を生成し、自在に操るといったものだ。はねるが近接型だとすれば、ユリヤは遠距離型のプログレス。距離を積めようと猛烈な勢いで迫るはねるに対し、させじと氷を生成し妨害するユリヤ。追いかける者と追い回される者。勝負ははねるが優勢かに思われた。

「どうしたの!・逃げてるだけじゃ勝てないよ!・」

「理解しているわ」

先ほどまでとは違いはねるの進行方向を氷で防がずに身をさらしたユリヤ。それをチャンスとみて突進の速度を上げたはねるだったが、はねるの突進を回避せんとユリヤが身を引いた先から最初のそれより更に巨大な氷塊が姿を現した。

「――――ッ!・」

「やっべ！」

即座に進路を変えようとしたはねるだったが間に合わず、迫る氷塊に激突してしまう。砕ける氷塊に紛れ、はねるがコートを大きく外れる。それと同時に身構えた宗悟の身にははねるが受ける筈だった激痛が襲い掛かっていた。αフィールド下では、αドライバーがプログレスの強化を行うと同時に、プログレスの身体的ダメージを肩代わりするといった現象も発生する。そのため、プログレスが被弾すればその痛みは直接αドライバーに伝わることとなる。それにより戦う気力が失われ、試合が終了するといった事例も少なくないのだという。この場面はまさしくそれの再現だった。はねるが氷塊に激突したダメージを肩代わりした結果、宗悟は痛みに悶えて戦いどころではなくなっていた。それを確認した冬木が試合終了の号令を発する。

「そこまで！　この試合、ユリヤ、川内ペアの勝利！」

川内と呼ばれたαドライバーがガッツポーズをする。ユリヤは試合前と変わらず涼しげな顔をしていたが、少しほっとしているようにも見えた。コート外へと投げ出されたはねるに数名の生徒が、痛みで悶えている宗悟の元には節成が、それぞれ駆け寄っていた。

「ちょっと、はねる！　大丈夫なの!?」

「――いったぁ……く、ないや。うん、大丈夫だよ」

ダメージを肩代わりしてもらったはねる側には何ら影響はないようだが、その一方で宗悟は酷く悶えていた。
「いッてぇぇぇ！んあぁぁ……ッ」
「おい、本当に大丈夫なのか先生！」
若干大げさなのではないかというほどの宗悟のリアクションに冬木に対して説明を乞う節成。冬木は呆れたといった表情で節成をなだめた。
「痛いのは仕方がないだろう、少し大げさだがな。これはαドライバー側のダメージを考慮せずに突っ込もうとした作戦ミスだな」
そう述べつつはねるを見据える冬木の先にはやってしまったと苦笑いするはねるの姿があった。
「この様にαドライバーにはプログレスの想像以上のダメージが行くことになるぞ！充分気を付けろ！」
「それを早く言ってくれよ……っ」
痛みに悶える宗悟。ブルーミングバトルは、節成の想像する以上に過酷なものであった。

――

何試合かが過ぎ、バトルコートには少しばかり怯えながら試合に臨もうとするレミエ

ルの姿があった。出来るならレミエルを戦いの場には置かせたくは無かったと心の中で思う節成であったが、授業の一環であるという事がそれを拒んでいた。ここまで来てしまったからには、自分もレミエルもやるしかない。そう己を鼓舞する節成とは対照的に、レミエルはただ怯えるだけであった。眼前にいる相手が数分後には襲い掛かってくる。戦闘に対する恐怖は勿論あったが、それよりも大きい恐怖をレミエルは抱えていた。

「レミエル、大丈夫だ。落ち着いて行こう」

後ろから聞こえてくる節成の声を聞いて、レミエルはほんの少し冷静さを取り戻した。そうだ、これは演習、失敗しても大丈夫。そう自分に言い聞かせ、レミエルは試合開始の合図を待った。

「ねえ、あんまり調子よさそうじゃないけど、大丈夫?」

唐突に向けられた声に驚くレミエル。レミエルの対戦相手、”静宮蘭”だ。その眼鏡の奥の瞳が自分を心配そうに見つめている。

「だ、大丈夫です。ありがとうございます」

「そう?ならいいんだけど」

蘭の思いがけない言葉にレミエルは落ち着きを取り戻していた。その様子を後ろから見ていた節成は少しばかり安堵の息を漏らした。レミエルがリラックスできている

ならなんとかなりそうだ。そう思う節成の耳に冬木の声が入る。
「両チーム、準備はいいな！」
冬木が試合開始の合図を出そうとしているのを確認し、節成とレミエルは身を引き締める。節成たちは先ほどの宗悟のようにならないように、慎重に出方を見るという作戦方針を立てていた。なるべくお互いに負担をかけないような堅実的な戦いをする。二人は来たる試合開始の合図を待った。
「――試合開始！」
「αフィールド！エクシード・リンク！」
合図と共に意識をレミエルのそれと同調させる。そのままレミエルの潜在能力を引き出そうとしたその瞬間、節成を激しい眩暈が襲った。今まで感じたことのないそれは、節成の意識を奪い去るには充分すぎる物であった。意識を深い闇の底へと誘われる節成。最後に目に映ったものはレミエルに手刀を突き付けんと迫りくる蘭と、リンクが届かないことに戸惑うレミエルの姿であった。
「節成！」
宗悟の声が頭に響く。橙色の光が節成の意識を包み込む。節成はそれに抗えないまま、意識の底へと沈んでいった。

「レミ……エル——」

Ａｃｔ．３　ブルーミングバトル

誓い

節成の意識は、橙色の光に包まれていた。ブルーミングバトルでレミエルとリンクしようとした節成だったが、レミエルの精神とシンクロした途端、急に意識が現実から切り離されてしまったのだ。彼方上空へ上昇しているとも、奈落の底へ落下しているとも取れるその感覚に節成は呑まれるばかりだった。一瞬とも永劫とも感じられる感覚の果て、節成は橙色の空の下にその意識を置いていた。

「――な、何が起こった……？」

先ほどまで自分は青蘭学園の校庭に設けられたコートにいたはずだ。それがいつの間にか、まるで古代ギリシャの物を思わせる建設物が並んだ場所に立っている。一瞬にして変化した身の回りの状況に、節成は困惑するばかりであった。とにかく現状を把握しなければと、周りを歩いている、これも現代日本で着られている物とは大きく離れている風貌をした人に話しかけてみる。

「あの、すいません。ここが何処だか教えていただけますか？」

しかしその言葉に対する反応は、文字通り一切無かった。返答が得られるどころか、こちらに見向きもしないのだ。まるで自分がここに存在しないかのように。

「夢の中なのか……？」
夢の中なのであればこの状況にも説明がつく。恐らくブルーミングバトルの最中に意識を失ってしまったのだろう。もしそうであれば――
「そうだ、レミエルは!?」
リンクをしていなければブルーミングバトルで発生するダメージはプログレスを直接襲うことになる。辺りを見回しレミエルを探す節成だったが、しかしここは現実世界ではない可能性が高い。そんな折、遠方にふと目をやると片方の翼が無い天使の姿が見えた。レミエルだ、と確信を持った節成はすぐさまその天使の元へ駆け寄ろうとする。
しかしそれを唐突に放たれた怒声が遮った。
「何でお前なんかがここにいるの！」
節成は急に放たれたその罵声に思わず身構えた。周りから見れば自分は間違いなく異邦の人であろうが、その言葉は自分に掛けられたものではなかった。怒声を放った女が目の前の片翼の天使に歩を進めた。それを認めた天使――レミエルはその歩みを止める。
「ここはお前の様な〝穢れた天使〟がいる場所じゃないのよ！」
〝穢れた天使〟。その単語に節成はハッとする。αドライバーがプログレスとリンクを行う際、その感受性が高いとプログレスの意識や記憶がαドライバーに向かい逆流

する場合があると資料で見かけた記憶がある。もしその通りであるなら、これはレミエルの記憶という事になる。今のこの状況はレミエル自身が経験してきた過去そのもの。それが目の前で起こっているのだ。

「そうだ!〝穢れた天使〟は辺境にでも行ってろ!」

今度は別の男性がレミエルに向かって罵声を浴びせながら落ちている石を投げつける。投げられた石はレミエルの頭部に直撃し、その体制を崩させる。地に付したレミエルの額からは血が流れていた。目の前で起こっている、差別と言うにはあまりにも酷いその有様に節成は言葉を失う。これがレミエルの過去。あの日、すべての事象に絶望しきっていた瞳はこれらの出来事がきっかけで生まれたものだったのだ。その一端を垣間見た節成は、思わず目を背けた。硬く目を瞑り、目の前の事象を否定し、自分の中から排除するかのようにうずくまる節成。こんな酷いことがあってたまるものか。これではレミエルが可愛そうだ、救われない。そんなことを考えていた節成を、再び眩暈が襲う。ブルーミングバトルの最中に感じたものと同じ感覚に、節成の意識は再び暗闇に閉ざされた。

――

恐る恐る目を開けると、まばゆい蛍光灯の光が節成の意識を襲う。体に力があまり入らない。どうやら自分は保健室のベッドに横たわっているようだ。ふと誰かの気配を

感じ、その方向へと顔を向ける。そこには腕を組み、何か考え事をしているかのような表情をした冬木が座っていた。節成の視線に気づいたのか、冬木が目を開け、こちらを向く。一瞬の安堵の表情の後にいつもの様な達観したような表情を見せる冬木。
「やっと目を覚ましたか。体に問題はないか？」
真っ先に自分の体の心配をしてくれる冬木に、この人もやはり教師なんだなと感じつつ自分の状況を伝える節成。
「――はい、いつもより少し気だるげですが大丈夫です。意識もはっきりしてます」
その言葉を伝えると、冬木は今度こそはっきりと安堵の表情を見せた。
「そうか、良かった。全く……心配させやがって」
冬木のその珍しく優しめな声に、節成も自然と笑みをこぼす。しかし、自分が意識を失った状況を思い出し、その笑みも消える。
「そうだ、あの後どうなったんです？レミエルは大丈夫なんですか？」
もしかすると、レミエルへのダメージが肩代わりされていないと気付かなかった相手のペアがレミエルに思いきり攻撃してしまったかもしれない。焦る気持ちを堪えつつ冬木に問う節成だったが、そのあとの言葉に安堵する。
「自分の事よりレミエルの事か……全く、お人よしもここまで来ると考え物だな。レミエルなら大丈夫だ。静宮の奴、レミエルに当てる前に手刀を寸止めしてみせたのさ」

レミエルに怪我はない。そのことを知った節成から力が抜ける。一先ず最悪の事態は免れたようだ。
「少し休んだら顔でも見せに行ってやるんだな。レミエルの奴、だいぶ落ち込んでるようだったからな」
そう言葉を残して保健室を後にする冬木。レミエルが落ち込んでいる。嫌が応にも先ほど幻視したレミエルの記憶が蘇る。あまり休んでる暇もなさそうだと、自分の体に鞭打ち起き上がる節成。保健室のドアを開き、外に出るとそこにはブルーミングバトルで悶え苦しんでいた筈の宗悟の姿があった。
「宗悟、もう大丈夫なのか？」
「おいおい、そりゃこっちのセリフだぞ！お前はいきなり倒れるし、レミエルちゃんはあの後見かけないし、てんやわんやだったんだからな！」
レミエルの姿を見かけないと言った宗悟に節成は食って掛かる。
「見かけないって——最後に見たのはいつ！何処だ！」
「やけに元気だなお前。最後に見たのは確か……階段だったかな、屋上に行ったのかもしれん」
宗悟の言葉を聞くなり踵を返し屋上へと向かおうとする節成。それを宗悟が腕をつかんで引き止める。

「何すんだ宗悟！」

「落ち着けよ節成、少し頭冷やせって。そんな顔でレミエルちゃんの所に行っても怖がらせるだけだろ？」

言われてみれば、今の自分に心の余裕があるかと聞かれればないし、顔も強張っていた。宗悟の言葉通り、少し自分を落ち着かせようとする節成に、宗悟は珍しくまじめな顔をして語り掛ける。

「レミエルちゃん、だいぶきつそうな顔してたぜ。俺が声かけてもろくに返してくれなかったよ。ブルーミングバトルが上手くいかなかったことよりも、お前が倒れた事を相当心配してるみたいだった」

自分が気を失っている間に起こったことを話す宗悟。その表情から、宗悟のやるせない気持ちが伝わってくるようだった。

「俺、何もしてやれなかった……。病み上がりのお前に頼むの何か違いかもしれないけど、何も出来なかった俺の分もレミエルちゃんの事、励ましてやってくれ」

「――言われなくても」

宗悟なりの後押しだったのかもしれない。先ほどとは違い頭を冷やした節成は、その足を学園の屋上へと進めた。

――

空は既に夕焼けに染まっていた。急いで屋上に向かい、階段を駆け上る節成。屋上へと通づるドアを開けたその先に、記憶の中で見たものと同じ後ろ姿があった。純白の翼を夕焼けのオレンジに染めて、レミエルはそこに立ちすくんでいた。
「――レミエル」
そっとかけた節成の声に反応し、レミエルはゆっくりと振り返る。その目尻には涙が浮かんでいたが、節成の顔を認めると安堵の表情を浮かべた。
「――節成さん、目が覚めたんですね」
「おかげ様でな」
そのままレミエルの横に身を置く節成。二人は並んで、橙色に染まる空を見つめていた。
「宗悟から聞いた。心配してくれてたんだってな。その、ありがとう。」
「そんな……。私は何もできなくって」
二人の間に微妙な空気が流れる。これでは励ますどころじゃない。節成は思い切って話を切り出そうとした。
「レミエル、その――」
しかし、それを遮る形でレミエルが一歩早く口を開いた。
「節成さん、私はですね、テラ・ルビリ・アウロラでは〝穢れた天使〟って呼ばれてたん

です」
その言葉に聞き覚えがある。幻視したレミエルの記憶で聞いた、あの言葉だ。
「私は生まれつき片方の翼が無くて、皆からそう呼ばれてました。普通の天使には翼が二つあるのに、そうじゃないって理由で。片翼の天使は災いを呼ぶんだそうです。最初は女神様がかくまってくれていたから表だっては言われなかったんですけれど、ある日突然女神様が別の天使を従えて……。私は女神様に見捨てられて、野良天使になりました。それからというもの、罵声は激しくなって――」
記憶が蘇る。あの出来事は本当の事だったのだ。節成はやるせない気持ちになっていた。あの時目を背けた出来事は現実のもので、レミエルはそれを味わってきた。その事実を知った節成はレミエルに言葉をかけられないでいた。
「私自身、自分で自分を落ちこぼれだって思うようになってしまって。でも、ガブリエラ様――大天使様の助言で青の世界に行くことになって、そこでなら自分をやり直せるって、そう思ったんですけど……結局ダメダメでした。そんなときに、貴方に出会ったんです」
レミエルが綴る、自身の過去。想像以上に重く苦しいそれを、節成は噛みしめて聞いていた。レミエルの味わってきた苦しさを想い、自然と涙腺が緩んでいく。
「貴方があの時手を差し伸べてくれなければ、青蘭学園に入ろうだなんて思いもしませ

んでした。もう一度、やってみようって。頑張れば、いつか空を飛べるって」
語ることを語りつくしてしまったからなのか、レミエルはそれ以上言葉にしなかった。ただ空を見つめている。その横顔を見つめながら、節成は考えていた。今の自分に出来る事。レミエルに幸せを味わってほしい。その為にやるべき事。この数日間で半ば見つけていたその答えを、節成はその瞬間に見出していた。
「――レミエルの事、よく分かった。凄く苦しい思いをしてきたことも、哀しい事があったことも。それを知ったうえで、誓う」
約束ではなく、誓い。己の全てをかけて、レミエルに誓う。
「俺が、レミエルの〝翼〟になる。いつか空を飛べるように、俺が片方の翼になる。もう悲しい思いはさせない。……だから！」
そこまで口に出した辺りで急に気恥ずかしくなる。これではまるで愛の告白ではないか。決してそんなつもりはないと自分に言い聞かせ、最後の言葉を伝える。
「だから、もう泣かないでくれ」
全てを伝えた節成をレミエルが見つめる。春の温かい風がレミエルの頬を凪ぎ、目尻に溜まった涙を洗い流すようだった。
「――ありがとうございます」

何度目かの感謝の言葉。しかし今までとは決定的に違う温かさが、それにはあった。
希望に満ちたその言葉と共に、節成は初めてレミエルの笑顔を見たのだった。

Ａｃｔ．４　誓い

信じること

　あれから数日が経った。突如として起こった騒ぎにクラスは一時騒然としたが、節成の身を襲ったリンク時の逆流現象に後遺症はなく、あの後すぐにクラスに復帰することができた。あの出来事以降レミエルもクラスに少しは馴染めたようで、今ではクラスの女子生徒数名と話す姿も見れるほどだ。その光景に節成は安心を覚えるのだった。一方で節成とレミエルのリンク時のシンクロレベルが思わしくないことに関しては、一向に改善の兆しが見えなかった。一般的にシンクロレベルは、プログレスとαドライバーとの信頼関係、いわば〝絆〟によって大きく変動するものだ。あれ以降節成とレミエルとの間の信頼関係はある程度深まったと節成は自負しているのだが、何度か試してみたもののリンクは一度として成功しなかった。そして今日もまた、節成とレミエルはリンクの特訓をするのであった。

―――

「さて、今日で特訓も五日目なわけなんだが」
「まだリンク、成功しませんね……」
　放課後、お互いに帰宅部である二人はグラウンドの片隅でリンクの特訓をするように

なっていた。あれから幾度となく試してはみているが、リンクが成功する兆しは未だない。進展と言えば、初リンク時に発生した逆流現象がなりを潜め、あの時のように突然倒れることは無かったくらいだろう。二人は一端リンクを試みるのを中断し、何が原因か探っていくこととした。

「そもそもリンクっていうのはお互いの絆がものをいうんだよな？それなら問題ない筈なんだが」

あの〞誓い〟から数日が経ち、節成とレミエルが接する時間は間違いなく増えていた。授業の間の休み時間や昼食時には宗悟を含めた三人で世間話などを交わしている。レミエルも初対面とは見違えるほどの笑顔を見せるようになった。それを加味すればリンクが成功しても良いと思うのだが。

「他に何か問題があるんでしょうか」

「うぅむ――」

二人が答えを見いだせずに唸っていると、その背後から道着を身にまとった生徒が近づいてきた。

「お前、確か1―Bのヒナタセツナか？」

節成は自分の名前を呼ばれ、声のする方へ振り向く。そこには剣道着を着て竹刀を腰に構えたポニーテールの生徒が立っていた。自分の苗字を間違われ、少し顔をむくませ

る節成。思わず喧嘩腰の口調で言葉を返してしまう。
「ヒナタじゃない、ヒュウガだ。そういう君は?・何者?・」
苗字を間違えたことを知り、やってしまったと見て取れる顔をする剣道着の生徒。その後、すぐさま節成に頭を下げながら謝罪の言葉を向けた。
「ご、ごめんなさい、読みを間違えてしまったみたい。――私は〝御影葵〟よ、1―Cクラスの。」
御影葵と名乗った女子生徒だったが、節成はその名を知らなかった。
「えっと、俺は君の事知らないんだが。君は俺を知ってるみたいだな」
「この間のブルーミングバトルで急に倒れた生徒として噂されていたものでね」
割と不名誉な理由で噂されていたことを知り、少々落胆する節成。そんな節成をなだめつつ、レミエルは葵に向け口を開く。
「その御影さんが、私たちに何か用ですか?」
「葵でいいわよ。どうやら特訓でもしてるみたいだったから、少し気になってね」
どうやら葵は自分らの特訓に協力してくれるようだ、と理解した節成とレミエルは現状を葵に伝える。初のリンク時に気絶したこと。あれ以降リンクが上手くいかないこと。それを聞いた葵は自分の見解を口にする。
「聞いた限りだと、二人の間の信頼関係に関してはあまり問題なさそうね。となると、考

えられるのは相性、か」
「相性？ リンクに相性が必要なのか？」
そのようなことは節成にもレミエルにとっても初耳だった。率直な疑問を葵にぶつける節成に対し、葵が続ける。
「冷静になって考えてみて。剣を使う人と銃を使う人、コンビを組んだらお互いの歩調は合うかしら」
「ぅ――うん？」
葵の少々偏った例えにお互いに首をかしげる節成とレミエル。それを見て葵はやれやれといった調子で頭を抱える。
「――ごめんなさい、例えが悪かったわね。簡潔に言うと、お互いのタイプが合わなければ真価は発揮できないって事よ。さっきのをもっと簡単に例えると、百戦錬磨の剣豪に銃を持たせても大して扱えないって事よ」
「ま、まあそれくらいの例えなら分からなくもないか」
どうやら葵は説明下手らしいようで、節成が主張する例えを理解するのに少し時間が掛かってしまった。対してレミエルはというと、未だに頭上にクエスチョンマークが浮かんでいるような顔をしている。無理もない。
「要するに、俺とレミエルの相性が悪いからリンクが出来ないってことなのか？」

「断定はできないけど、その可能性は十分にあるわね」
　淡々と言葉にする葵に対し、節成は少し苛立ちを覚えていた。お前に自分とレミエルの何が分かる、と。だが葵の言い分にも一理あると、その感情を飲み込む。ここで葵に突っかかっても何の問題も解決しない。
「そうね……試しに私とリンクしてみる？」
　葵の急な提案に驚く節成とレミエル。リンクには特別な契約を結ぶ必要があるわけではないので、特定の誰かとしかリンク出来ないという事はない。リンクの成功を体験したことのない節成にとって、この申し出はまさに行幸と言えた。
「——わかった、やってみる」
　葵の申し出を受ける節成。一方でレミエルはそのやり取りを傍で聞き、何とも形容しがたい感情に襲われていた。節成が自分ではない誰かとリンクをする。特訓の為致し方が無いと理解してはいるが、どうしても心がモヤモヤする。レミエルにはその感情が一体何なのか、まだ知る由もなかった。
「始めるわよ」
　そんなレミエルを横に、節成と葵はリンクを行う体勢に入る。葵と互いに向き合い、目を閉じる。ブルーミングバトルをするのではないため、αフィールドは展開せずに葵の精神と己のそれを同調させる。レミエルとのリンクでは精神の同調時に目に見えな

い何かに阻まれているような感覚だったのだが、葵とのそれではすんなりとうまくいく。しかし、そのタイミングで節成は逆流現象の時に感じた感覚を覚える。あの時のように言い知れぬ不快感に身をよじることに対する恐怖。その影響で同調に若干の乱れが見えていた。額から汗がにじみ、体に力が入ってしまう。リラックスした状態で行わなければならないリンクに対し、節成の現状はいささか危なげがあるものだった。

「もっと精神をリラックスさせなさい。力んでいてはリンクなんてできないわよ」

理解はしている。しかしどうしてもあの感覚が体から抜けない。節成の感情が恐怖に支配されたまま、リンクは失敗するかにみえた。その時唐突に、温かい何かが節成の精神を包み始めた。温かく、優しさを感じさせる物が節成の恐怖心を取り除いていく。その〝何か〟に、節成は葵の姿を幻視していた。葵の心が節成の心を包み込んでいく。その頃には節成の心からは恐怖という物が抜けきっていた。目を開けると、視界には普段とは違う〝エネルギーの流れ〟の様なものが浮かんでいた。その流れが自分と葵を包み込んでいる。自分の気力、精神が葵と繋がっているかのように。

「成功……したのか？」

「まあ、なんとかね」

初めて成功したリンクの感覚に、節成は喜びを感じていた。自分の想像していた物以上に心地が良い。自分が葵を感じ、葵が自分を感じているかのようだった。精神が連結

し、互いの心が読み取れる。葵の心は、何と言うか、〝鋭い〟ものだった。何事をも切り裂く強い信念を表すかのようなそれを、節成は感じていた。そこまで感じたところで、節成と葵の間のリンクが途切れる。その瞬間、節成の体を強い脱力感が襲った。思わず体がよろけ、あわや転倒といったところでレミエルに抱きかかえられる。

「だ、大丈夫ですか⁉」

「あぁ――大丈夫」

レミエルに抱きかかえられた節成に葵が歩を進め、手を伸ばす。節成がその手を掴むと葵は一気に体を引っ張り、節成を立たせる。今度はしっかりと足に力を入れて転倒を防ぐ節成。その姿を認めた葵は節成に向け、称賛の言葉を放つ。

「まあ、上出来ね。これであのトラウマも克服できたでしょう」

トラウマ。言われてみれば、リンクの逆流現象の際に感じたそれを必要以上に恐れていたことに節成は気付く。

「今の感覚を忘れないうちに、もう一度試してみなさい」

そう言葉を残し、葵はその場を立ち去ろうとする。その姿勢に疲労一つ見せる事は無かった。

「ありがとうな、葵！」

節成の感謝の言葉に、葵は背を向けながら手を降る。気にするな、とでも言っている

のだろうか。レミエルもそんな葵に向け、お辞儀をする。リンク成功の感覚は得られた。あとは実践するだけだ。

「よしレミエル、もう一度やってみるぞ」

「は、はい！」

そうして節成はレミエルと向き合い、再びリンクを試みる。レミエルの精神と己の精神を同調させる。もう先ほどの様な恐怖は感じない。自分の心を制御しつつ、レミエルの精神と繋ごうとする。今まで感じていた、見えない何かに阻まれる感覚も今回はない。今度こそいける。そう感じた矢先、唐突に現実に引き戻される。繋がりかけていた精神が無理やり引き離される感覚に、少々の眩暈を感じる。目を開くと、ぺたんと座り込んでいるレミエルの姿が目に入った。自分でも何が起こったのか理解しきれていないような表情だ。今まで通り、リンクが失敗したのだ。

「なんで――」

その結果に、レミエルは落胆の感情を隠し切れないでいた。

――

翌日の朝、レミエルがまだ教室に到着していない事を確認した節成は宗悟に昨日の事を伝えた。リンクが成功直前で途切れたという事を聞き、宗悟は疑問を覚える。

「リンクってそんなに難しいものなのかねぇ？俺が土屋原とやった時はすんなりとうま

くいった訳だが」

「1―Cの御影とのリンクは初めてでも出来たのに、レミエルとはどうしても上手くいかない。どうも腑に落ちないんだよな」

「……お前、いつの間に他クラスの奴と」

リンクには信頼関係が必要とはいうものの、相当悪くなければ大抵成功するものだ。節成はそれを知っているからこそ、どうしても成功しないレミエルとのリンクに対して疑問を隠せずにいた。

「俺、実はレミエルに嫌われてんのかな」

「うーん、そんなことはないと思うんだがね」

相性の問題を葵に切り出された事もあり、自分とレミエルの関係に問題があるのではと感じ始める節成。そんな節成を案じ、宗悟も自分なりに解決に繋がる事を考える。二人にとってプラスになるような事。そんなことを考えていると、ある一つの方法が宗悟の頭に思い浮かんだ。

「思いついたぜ、この問題の解決策をよぉ！」

唐突に放たれた宗悟の自信ありげな言葉に驚きながらも少しの期待を抱く節成。脳筋でそこまで頭が回らないはずの宗悟が珍しく自信たっぷりな表情を見せている。それに節成は否応にも期待を抱かずにはいられなかった。

「ふっ、聞きたいか?」
「もったいぶるな宗悟、脳筋なりの回答だろうがさっさと聞かせろ」
回答を焦らす宗悟に冗談交じりに少々棘のある言葉を浴びせる節成。それに対して宗悟が口にした言葉は、節成の想像を悪い意味ではるかに飛び越えていくものだった。
「――デートだ!」
「――はァ!?」
丁度節成が声を上げたタイミングで教室に入ってきたレミエルだったが、突如として発せられたその声に仰天していた。

Act.5 信じること

陽だまりの中で

影をじっと見つめる。商店街を通り抜けた先の公園にあるベンチに腰かけながら節成は物思いにふけっていた。そして、何度目か数えるのも億劫になったが、ある言葉を脳裏に思い浮かべる。——何故こんなことになったのだろう、と。

——

「お前、デートって……冗談は顔だけにしとけ」

突如として宗悟から放たれた〝デート〟という単語に、驚くというよりはほぼ呆れの感情を抱きつつ節成は宗悟を軽蔑の眼差しで見つめる。まさかこんな大事な話の最中に呆れたことを口にする奴だったとは。

「冗談じゃねぇぞ、本気も本気だ！」

それに反して自信満々な態度で話す宗悟。

「友情を深めるのであればお互いの事をもっと知る必要があるだろ？それなら二人っきりになれるデートが一番効果的ってわけよ！」

確かに一理ある、と節成は一瞬思ってしまったが、すぐにその思考を頭から消し去りあくまで否定の立場を貫く。そこには節成自身の頑固な考えと無意識の恥ずかしさが

あった。
「いやありえないって。まだ知り合って一週間と少しくらいしか経ってないんだぞ?そんな期間でいきなりデートとか、仮にこっちがその気でもレミエルがなんて言うか」
幾ら友情を深めるためとはいえ、相手は女の子だ。そんな相手にいきなり思い切った真似をすることは節成には出来なかった。しかし、宗悟は節成の先走った考えとは違った言葉を口にした。
「確かにデートとは言ったが別にカップルになれとまでは言っていないぞ?あくまで一日二人で過ごしてみて、お互いの事を知り合うって事だ。節成君は何を先走っているのかねー?」
「ば、馬鹿うるせぇ!お前の言い方が悪いんだよ!」
そんなやり取りに気を取られて、節成たちは背後に〞デート〞にお誘いするとうの本人がいることに気付かなかった。
「でえと、ですか?」
節成はその声にギョッとする。振り返るとそこには聞きなれない言葉に首をかしげるレミエルの姿があった。
「でえとって、なんですか?」
「あ、いやその、それはだな」

レミエルの問いに言葉を詰まらせる節成。それを見かねた宗悟がこれ見よがしに首を突っ込んでくる。節成は反射的にそれを物理的に遮ろうとしたが、宗悟の腕力にはかなわずねじ伏せられてしまう。

「デートっていうはね、男女が二人で一緒に一日を過ごす事を言うんだ。お互いを知り合うために結構大事な事だったりするんだぜ？」

間違ってはいない。間違ってはいないのだが重大な事を欠いているように節成には思えた。そもそもデートとは相思相愛の仲の二人がするものなのではないのか。しかし節成の思いは裏切られ、宗悟の言葉をレミエルはすんなりと受け入れてしまう。

「そうなんですね、でえとって大事なんですね！」

やれやれと顔に手をやる節成。これでレミエルが誤解して知り合った人に片っ端からデートの申し込みをしてしまった暁には学園中から噂されてしまう。そんな少々想像が発展しすぎた節成の頭を更に揺るがす発言を、レミエルはするのであった。

「私、節成さんとでえとしたいです！」

――

「本当に、何でこうなったんだ」

節成は頭を抱える。これも全部宗悟の仕業だ。あれから数日が経ち、結局レミエルの申し出を断れないままデートをすることになってしまった。宗悟にはお勧めのデート

スポットを叩き込まれ、出来る限りのお洒落をしていけと言われたが、節成はそのようなお洒落な服など持ち合わせておらず、せいぜいパーカーなどを重ね着するのが精いっぱいだった。結局言われるがままこの場に来てしまったが、早とちりしたのか集合時間の三十分前に到着してしまい、今に至る。

「さて、本当にレミエルは来るのか――」

そう呟いた瞬間、話をすればばと言わんばかりに片翼の翼を持った少女の姿が目に入った。レミエルだ、と知覚し姿を認めた瞬間、節成は己の目を疑った。

「節成さん、お待たせしましたー！」

元気に手を振り近づいてくるレミエル。その姿は制服姿とは当然ながら異なっていて、大胆に胸元の開いた、地球ではあまり見ないデザインの服を身にまとっていた。最早〝服〟と形容して良いのか分からないほどそれには装飾が施されていた。

「おまっ、その恰好……！」

「な、何か変でしょうか？一応、赤の世界で着てた服なんですけれども……」

赤の世界の服と聞いて、これがレミエルにとっての普段着なのだと何となく理解した節成は、早くなった鼓動を一端落ち着かせてもう一度レミエルと向かい合った。

「いや、変じゃない。その、凄く綺麗だ」

お世辞ではない、本当に綺麗だと思った。

「えへへ、ありがとうございます。実は青の世界の服にも少し興味がありまして」
確かに地球での服装はレミエル達別世界の住人にとっては珍しいものなのかもしれない。そう感じ取り、宗悟の言葉を思い出す。〝デートに欠かせない場所とは――〟。
それに従おうと決心した節成は、慣れない言葉をひねり出すようにして吐き出した。
「……じゃあ、ショッピングがてら色々見て回るか」
「はい！」

――

行動に移ってからはこっちのものだ、と言わんばかりに節成は持ち前の適応力を発揮していた。もとより環境への順応性は高いと自負していた節成だったが、この瞬間己のそれを人生で一番誇っていた。レミエルが見てみたいと主張する洋服などを商店街で見て回るうちに、次にすべき事がある程度だが先読みできるようになっていた。そんなことを考えながら二店舗目となるブティックに訪れた二人。地球の服にひそやかに目を輝かせるレミエルに目をやる。天使とはいえやはり年頃の少女の外見に相応している、と感じた。そして、初めて出会った時の彼女と自然と照らし合わせてみる。今の様子こそが、彼女の素なのだろうと、自然と頬が緩む。
「節成さん、この服なんてどうでしょう」
「うん、凄く似合うと思うぞ」

べたな褒め方だとは思うが、これが節成の限界だった。流石にこれ以上の褒め文句は思い浮かばない。そんな折、ふと目を横にやると小物を扱ったコーナーが目に入った。

「……レミエル、ちょっと席を外す。ここで待っててくれ」

「え？ は、はい」

ふとした思い立ちだった。節成はなるべくレミエルを待たせないように、駆け足で店の奥に進むのであった。

―――

結局五分と経たずして節成は用を済ませて戻り、二人は商店街を歩いていた。あの後、少し気を落としたレミエルに行動の理由について問われたが、とりあえず〝お手洗いに〟とべたな理由を述べてやり過ごした。レミエルも一応納得はした様で、何か甘いもの一つで許してくれるようだ。以前渡したチョコレートを食べて以来、ハマってしまったらしい。後で何処かの店に寄ると約束し、二人はその足を郊外の小さな動物園に向ける。公園の一角を使っているに過ぎないため見れる範囲はたかが知れているが、他の世界から来たプログレス達には地球の動物が物珍しいらしく、割と人気の場所となっていた。節成につられ、園内の小動物エリアに訪れたレミエルは動物らを見つめながらつぶやいた。

「青の世界って、何と言うか、不思議ですよね」

「不思議？　どこら辺が？」
　節成にとっては当たり前な事が、レミエルら赤の世界の住民にとってはこの世界の全てが珍しいものだという事は理解していた。しかし、いざ不思議だと言われるとどうしてもこのような反応になってしまう。
「動物たちを見せ物にするなんて、改めて文化が違うなぁって。テラ・ルビリ・アウロラでは小動物は皆怖いって言ってますし」
　曰く、赤の世界での小動物も硬い木の実を主食としているが、時に妖精を襲う事もあるらしく、妖精族の間では恐れられているらしい。妖精という聖なる存在を食い荒らす穢れたものとして、それを恐れる人や天使も少なくはないのだという。穢れたものに対する恐怖と聞いて少し顔をゆがめる節成。以前節成の幻視したレミエルの姿を嫌でも思い出してしまう。あの住民も単に穢れたものに対して恐怖していただけではあるが、レミエルを穢れたものと扱っていることに対しては納得できないでいた。
「――どうしました？」
「あぁ、いや、なんでもない」
　どうやら自然と顔に不快さが出てしまっていたらしい。今の場に相応しくないと顔をはたく節成。余り長居をするのはよくないと感じ、別のエリアに向かう。少し歩き、二人は鳥類のエリアを訪れていた。

「鳥は好きです、私」

展示されている鳥たちを眺めながらレミエルが呟く。節成もそれに同感だと伝えるとレミエルは空を仰ぎ、少し儚げな表情を浮かべた。

「鳥は空を自由に飛べるから、好きなんです。私もいつか鳥みたいに自分の翼で自由に大空を飛んでみたいなって思います」

そこまで語ったところで再び展示されている鳥を見つめる。やはり儚げな表情のままであった。

「でも私は飛べないんです。鳥かごに捕らわれた、この子たちみたいに――」

節成はしまったと感じる。以前鳥が好きだと言っていたのでこの場に連れてきたのだったが、逆に悪手だったようだ。言われてみれば、この場は動物の自由を封じ見せ物にする場だ。そこまで考えていなかった節成はレミエルに詫びの言葉を入れる。

「すまん、不快だったな」

「いえ、大丈夫です」

二人はその場を去り、先ほど約束していたスイーツが食べられる店に向かう。元気を取り繕っている、とレミエルをみて感じる節成であった。

――――

「あれ、節成君だ、やっほー!」

「……相変わらずだな」
　商店街に戻り、クレープ屋を訪れると見知った顔と出くわした。日向美海。１―Ａクラスの生徒だ。以前ある一件で彼女を手伝ってからというもの、事あるごとに絡んで来ようとする。本人曰く〞苗字似てるし、きっと運命だよ！〟らしい。全く持って意味が分からない、と節成は内心煙たがっていた。
「そっちの子は……えっと、誰さんだっけ？」
「れ、レミエル、ですぅ」
　節成の陰に隠れながら美海に自己紹介するレミエル。そんなレミエルを気に留めもせず、美海は天真爛漫な態度で絡んでくる。
「レミエルちゃんだね、よろしく！　私は日向美海だよ！」
　美海の挨拶に、顔だけぺこりと下げるレミエル。人見知りの身には眩しすぎるのだろう。
「それで、節成君たちもクレープ買いに来たの？」
「まあ、そんなところだ」
　なるべく美海との絡みを少なくしようと、メニュー票と睨めっこをする節成。大のクレープ好きと自称し周りからもそう言われる美海は、何を買えばいいか悩む節成たちを見かねてお勧めの商品と思われる単語を羅列する。

「私のおススメは、クレープイチゴマシマシクリームマシマシアドチョコシロップ青蘭島スペシャルだよ！」
「何かの呪文か？」
　呪文を一片も理解できなかった節成は結局スタンダードなイチゴの乗ったクレープを選ぶ。レミエルも選ぶのに疲れたのか、節成と同じものを注文した。
「わぁ、美味しそうです」
　鮮やかな色をしたイチゴが乗ったクレープに、先ほどとは異なり元気に目を輝かせるレミエル。その様子を見て美海は満足げな顔をしてうんうんと頷く。
「クレープは美味しいよー！いっぱい食べてね！」
「何でお前がそんなに誇らしげなんだ」
　ツッコミを入れるのに疲れた節成はやれやれと頭を抱える。
「それじゃあ、私はこの後ソフィーナちゃんと約束があるから！じゃあねー！」
　先ほどの呪文を唱え、めいっぱいのイチゴとクリームが乗った巨大なクレープを受け取った美海は手を振りながらその場を去っていく。後には唖然とした顔の節成とレミエルが取り残された。
「……なんというか、嵐の様な方でしたね」
「全くだ」

しかし、結果的にレミエルの機嫌は割と良くなっていたようだ。その点のみ、節成は美海に心の中で感謝するのであった。

――――

嵐のような出来事ののち、クレープを手にしながら二人は集合場所にもなった公園のベンチに腰掛けていた。思った以上に時間を使ったのか、遠くの空は既に橙に染まっていた。クレープを美味しそうに頬張るレミエル。その表情はとても満足げなものであった。節成自身も、なんだかんだ今回のデートを楽しめたのだろうと振り返っていた。

「なあレミエル」

唐突に自分の名を呼ばれ、頬についているクリームも拭わずに反応するレミエル。そんな彼女に、言おうとした事を一瞬忘れ少々吹き出しそうになる節成だったが、それを抑えティッシュを鞄から取り出す。

「……クリームついてるぞ」

ティッシュでレミエルの頬を拭う節成。あの出来事のせいで思った以上に混沌とした一日だったので、これがデートだという事を忘れていた。自然と取った動作に少しの小恥ずかしさを感じる節成だったが、レミエルはそんな事とは無縁と思わせる笑顔を節成に向けた。

「えへへ、ありがとうございます」
そんなレミエルを見て、自然と節成も笑顔になる。レミエルが笑顔になると自分もつられてしまうな、とふと自覚する節成。その言葉を飲み込み、先ほど聞きそびれた事を尋ねる。
「なあ、今日は楽しかったか？」
尋ねられたレミエルは考えるまでもないとばかりに即答してみせた。
「楽しかったです、とても。私なんかがこんなに幸せでいいのかなって思うくらいに」
笑顔ではあるが、どこか儚げな表情を見せるレミエル。動物園での悪手があったが、結果的に楽しんでくれたようで何よりだと節成は思った。
「……夕陽、綺麗ですね。テラ・ルビリ・アウロラとは違って、青い色も混ざってます」
「彼の宇宙飛行士曰く〝地球は青かった〟とのことだからな。こういう所が青の世界って言われる所以かもしれないな」
そんな他愛ない会話の中で、節成は先ほど秘密にしていたある物を取り出す。レミエルと共に訪れたブティックで見つけたものだ。
「これ、プレゼントだ。さっき見つけたやつなんだが」
節成の差し出したものを受け取るレミエル。突然の贈り物に少しばかり戸惑っているようだった。

「あの……私、何か贈られるような事しましたか？」
「俺が贈りたいって思ったんだから、そうなんじゃないか？」
　首をかしげながら、包装を解くレミエル。少し不安げにそれを見つめる節成。少し経ったのち、レミエルの手から白いヘアピンが姿を現した。白い花が添えられたそのヘアピンを眺め、レミエルは驚きの色を隠せなかった。
「凄く綺麗……。これを私に？」
　無言で頷く節成。小恥ずかしさでレミエルに顔を向けられないので、そっけない反応になってしまったと少し後悔する節成だったが、そのようなことは気にもせず、レミエルは贈られたヘアピンを陽に照らして眺めているばかりだ。
「折角なんだから、付けてみなよ。きっと似合う」
「そ、そうですね。付けなきゃ勿体ないですよね」
　節成に促され、ヘアピンを髪に留めるレミエル。左の前髪にそれを留めたレミエルは少し恥ずかし気に節成を見つめる。
「――どうでしょう。似合いますか？」
　レミエルの金色の髪の中に白い花が覗き、自然な調和を見せている。まるで夕陽の中に咲く一輪の花の様だと節成は感じた。
「似合ってるよ、とても」

素直な思いを述べる。
「――ありがとうございます」
一日の終わりにレミエルが夕陽の中で見せた笑顔は、正に一輪の花の如き美しさだった。

Ａｃｔ．６　陽だまりの中で

黒魔女

レミエルとのデートから数日。あれ以来レミエルと話す回数は目に見えて増えた。宗悟のアドバイスもあながち間違いではなかったようだ。その宗悟だが、現在テスト対策に追われているのだという。宗悟は自他共に認める脳筋であることは最早クラス中が周知の事実なのだが、数か月が経って改めて学力の低さが浮き彫りになっていた。そんな彼に付き合わされて、節成は学園内のカフェテリアを訪れていた。カフェテリアはその過ごしやすい環境と生徒であれば格安で提供されるドリンク類の存在から、団らんや自習に用いる生徒が多い。宗悟もまたその環境にあやかり、いよいよ本腰を入れてテスト対策に乗り出すらしい。

「おっ、来たな節成！」

「来てやったぞ。アドバイザが欲しいとか言ってるが、ろくに教えられるかは分からないからな。」

宗悟は、自習にはアドバイザが必要だと主張し節成を誘ったのだが、節成にはそれが退屈しのぎの話し相手程度のものだと分かり切っていた。事実、以前に宗悟の勉強に付き合った時もまともなアドバイスすらスルーされ、結局世間話で終わってしまった。そ

の為、節成には今度こそはという気持ちも多少はあった。
「で、早速だが分からないところってどこよ?」
「全部。」
頭を抱えた。同時に深いため息をつく。授業中の宗悟を見た感じ話はしっかり聞いているのだが、それが頭に入っていないらしい。
「――それじゃあとりあえず社会科辺りから始めるか。問題集か何かあるか?」
そう尋ねると、宗悟は鞄の中をまさぐり始める。しかし、暫く探ったのちその動きが止まった。節成は今後の展開を察し、再び頭を抱えた。そして、宗悟に戒めの言葉を贈ろうとした矢先に、聞き覚えのある声を含む会話がカフェテリアの片隅から響いてきた。
「んにゃー!わかんない!」
「全く……。いい?もう一度言うわよ――」
節成が声のした方へ顔を向けると、そこには日向美海と見知らぬ生徒の姿があった。フリルの入った黒い衣装に身を包み、その背中からはレミエルの物とは異なる、まるで蝙蝠の様な翼を覗かせている。視線に気づいたのか、美海が顔をこちらに向け、手を振りながら迫ってくる。
「あっ、節成君だー!おーい!」

「ちょっと！話の途中で席立たないで！」
　黒衣の生徒の制止も聞かずこちらに歩いてくる美海。宗悟はそんな彼女の為にいつの間にかわざわざ椅子を持ってきていた。節成は三度頭を抱えた。少しづつ頭痛がしてくる。
「こんにちは！節成君たちも勉強？レミエルちゃんはいないの？」
「俺じゃなくてこの馬鹿の勉強な。レミエルは用事があるって話だから一緒じゃない。」
　そう言いながら節成は宗悟を指さす。〝馬鹿〟と罵られた本人はというと、そんなことは気にも留めずに美海との会話を図っていた。
「君、1―Aの日向美海ちゃんだろ？俺、国後宗悟ってんだ！」
「宗悟君だね！よろしくー！」
　がっちりとハンドシェイクを交わす二人。お互いに気が合うのだろうか、調子づいて色々と話しているようだ。厄介な二人が出会ってしまったと苦笑いしていると、先ほど美海の制止に失敗した生徒がため息を零しながら歩いてくる。
「馬鹿同士が出会ってしまったわね。」
「あぁ。馬鹿が二人だ。」
　そんな彼女と、初対面ながらに感想が合致してしまう。目の前の惨状から目を逸らすように、節成はその彼女に尋ねた。

「で、君は?」
「私?私は〝理深き黒魔女〟、ソフィーナよ。」
ソフィーナ。その名前に節成は聞き覚えがあった。以前美海と偶発的に出会った際、去り際に言った言葉の中にその名前が含まれていたのを思い出す。
「君がソフィーナなのか。奴とつるんでる人な訳だから、似た感じを想像してた。」
「……馬鹿にしてるの?」
ソフィーナは笑顔を向けてくる。目が笑っていなかった。プライドが高そう、といったのがソフィーナの第一印象だ。
「冗談だよ、冗談。」
「そう、ならいいのだけれど。」
そんな言葉の応酬を交わし、テーブルの向かい側の二人を見つめる節成とソフィーナ。最早勉強などほったらかしの状態という惨事が眼前に広がっていた。いつの間に取り出したのか、今流行りの携帯ゲームを二人して遊んでいるようだ。事態を打開することが最優先事項だと目線で交わし、節成とソフィーナは席を立つ。
「いいかお前ら、今から図書室に行って問題集と資料集を取ってくる。」
「遊ぶのはいいけど、私たちが帰ってきたら私がいいって言うまで問題解かせるわ。覚悟しておくことね。」

はーい、と軽い返事が返ってきたところで節成ら二人はカフェテリアを後にし、図書室へと向かう。二人の心の中には、彼らが逃げ出す事への一抹の不安があった。

――

「君も随分苦労してるんだな。」

「お互いさまみたいね。」

図書室へと向かう道中、同じ境遇の二人は愚痴をこぼし合っていた。そんな中、今まで聞いていなかったことを節成は切り出す。

「ところでなんだが、〝理深き黒魔女〟って何だ？」

節成には〝黒魔女〟という言葉にあまり聞き覚えがない。しかし、魔女と自称する以上この世界の住人でない事は確かである。

「よく聞かれるわ。ダークネス・エンブレイスではそう呼ばれてたの。……まあ肩書きみたいなものよ。」

肩書きと聞いて節成は舌を巻いた。一般的に肩書きなど早々付くものではない。ダークネス・エンブレイス――つまりは黒の世界ではどうなのかは分からないが、どちらにせよ結構な人物の様だ。

「肩書きねぇ。黒の世界では何を？」

「学問、魔術、統治。いろんなことを教えられたわ。ま、次期魔女王候補の中ではどれも

最も優秀だったわ。」
ソフィーナの語る言葉の中に、節成の理解の範疇を超える言葉が含まれていた。限りなくスケールの大きいような単語だ。
「――ちょっと待て。〝次期魔女王候補〟?」
「そうよ。私、次の魔女王の座を継がされるの。」
節成は驚愕した。〝魔女王〟。それはダークネス・エンブレイスを治める絶対的な君主の事だ。その魔術は他のそれを寄せ付けぬほど強力且つ絶大であり、文字通り黒の世界最強の名を欲しいままにしているらしい。
「おいおい、何でそんな大層なお方がこんな学園にいるんだ。」
「私だって望んでここにいる訳じゃないわよ!学問は低レベルだし、立場が立場だから友達は出来ないし……。今の魔女王の命で仕方なくなんだからね!」
そこまで聞いたところでふと疑問に思う。そんな彼女が美海と行動を共にしている理由だ。聞いた限りでは彼女に釣り合うとは到底思えない。美海持ち前の友達作りの才能を持ってしても友人関係を築くことは容易ではないだろう。それが何故。
「――不快なら答えなくていい。何故美海にあそこまで肩入れする?」
率直な質問だった。正直、ほぼ初対面の段階でそこまで踏み入ってはいけないような気もしていた。だがどうしても気になってしまったのだ。その為、答えが返ってくると

は期待出来ないと思っていた。事実、ソフィーナは沈黙を貫いている。二人の間に険悪な空気が漂っていると節成は感じた。

「悪い、今の質問は忘れてくれ。」

「――ええ、忘れるわ。」

意図的に視線を逸らすソフィーナ。結局、図書室からカフェテリアに戻るまでの間それ以上の会話は交わされなかった。

――

カフェテリアに問題集を持って戻ると、そこには机に突っ伏した宗悟と美海の姿があった。その傍らには菓子の袋が散乱している。結局あの後菓子を用いた宴が催されたようだ。節成とソフィーナはその光景を見て呆れかえる。

「――何やってたんだこいつ等。」

「全くね。私達、とんだ貧乏くじ引いたのかも。」

まるで飲み会後の酔っ払いだと形容できるほどの光景を目の当たりにし、先ほどの疑問が再び頭をよぎる。しかし節成はそれを一先ず振り払い、宗悟らを叩き起こすことから始めようとする。寝ぼけているのか、未だ夢の中なのか、宗悟ら二人は引きずらなければ動けないような状態となっていた。

「流石にこんなになるのはおかしくない？」

「あぁ、おかしいな。本当に何やってたんだ——」
　と言いかけたところでとある箱が目に入る。そのパッケージにはコミカルな文字で”ウィスキーボンボン”とあった。節成とソフィーナはこの惨状を生み出した張本人を目の当たりにし、大きくため息をつく。まるで酔っ払いだと思っていたところが、本当に酔っぱらっていたらしい。節成の頭痛が更に酷くなった気がした。

——

　その後二人を保健室へと運び込んだ節成とソフィーナは、再びカフェテリアへと戻っていた。先ほどの重労働の疲れを癒すためである。
「ともあれ、お疲れ様。」
「お疲れ様。結局勉強どころじゃなかったわね。」
　あの状態で勉強を教えられる訳もなく、結果的に今回の自習は大失敗に終わった。どうやらソフィーナらも同じ目的だったらしく、奇しくも同じ境遇に立った二人の意見が一致し、今に至る。
「本当に、世話の焼ける子なんだから……。」
　ふと言葉を零すソフィーナ。その表情は困っているようで、しかしどこか嬉しそうなものであった。その様子を見た節成は、先ほどの疑問の答えを察した。立場上、友達が出来ないとソフィーナは自ら語ったが、美海とは仲がいいように見える。それは美海が

立場など気にせずにソフィーナと付き合っているという事になるのではなかろうか。そんな事を思った節成は、美海に対する見方を変えるべきなのではないかと感じた。気さく過ぎる態度の裏にはどんな人物にも分け隔てなく接する非常に寛容な心があったのだ。そして、ソフィーナ自身もそんな美海に対し自ら世話を焼いている。そんなことを思い、節成にも自然と笑みがこぼれる。

「——あら、随分と嬉しそうな顔ね。」

ソフィーナの言葉で現実に戻される節成。

「そう見えるか？」

「ええ、とても優し気な顔。貴方も結構な物好きなのね。」

物好き。ソフィーナは見透かしたような眼で語り掛けてきた。なんだかんだ言ってはいるが、節成自身そこまで友人が多いわけではない。そんな節成に気さくに声をかけてきたのが宗悟だったのだ。あれ以来、なんだかんだと関係は続いている。彼女も自分の境遇と世話焼きな性格を見抜いていたようだ。

「似たもの同士みたいだな。」

「そうみたいね。」

顔を合わせて笑う二人。節成の心の中は、優しい感情で一杯になっていたのであった。

——

「神通先生、流石にまだ早すぎるんじゃないかしら?」
「いや、むしろ遅いくらいだと私は思う。」
職員室で会話をする二人。その表情はお世辞にも明るいものとは言えないものだ。
「だって、まだブルーミングバトルの演習は指で数えるほどしかやっていないのよ?」
「いずれ通る道だ、遅いより早く体験しておいた方がいい。そう思わないか、安堂先生。」
安堂と呼ばれた教師。その手の下に置かれた書類の表紙には〝ブルーミングバトルクラス対抗戦〟の文字が刻まれていた。

Ａｃｔ．７　黒魔女

自分らしさ

いつものように冬木がホームルームの終了を告げると、いつものように放課後が始まる。節成らが青蘭島で過ごすようになってからおよそ二か月が経過していた。クラスメイトとはすっかり顔なじみとなり、たまに商店街などで出くわすと軽い感じで挨拶を交わす程度には関係も進展していた。

そんな節成がこの二か月で新たに興味を引くものがある。紅茶だ。とある貴族らしい女子生徒から紅茶の素晴らしさを半ば無理やり語られて以来、何かと気になっていた。実際口にしてみると、使用した茶葉に応じて様々に風味が変わる。そんなところを節成は気に入っていた。

「なあレミエル、紅茶って飲んだことあるか？」

そう尋ねられたレミエルは少し考えてから首を振る。

「ええと、多分ないと思います。青蘭島に来てからはずっと〝にほんちゃ〟ってものでしたから。」

意外だった。赤の世界でも紅茶は嗜まれているらしいのだが、それを口にしたことがない。しかもなぜか今まで日本茶、つまり緑茶しか飲んだことがないとは。

「なんで日本茶なんだ……。まぁいいや、折角ならこの後喫茶店にでも行かないか？　いい店を知っているんだ。」

これもいつぞやの貴族っぽい女子生徒からの受け入りなのだが、それは伏せておく。

この二か月間で何度も宗悟やレミエルと昼休みの食事を共にしてきたが、レミエルと二人だけの時間といったものはあまり無かった。その反面、宗悟と二人っきりといったシチュエーションはなぜか多い。そんな宗悟は二人の会話を聞いて首を突っ込んでくる。

「お、優雅だねぇ。俺に誘いはないのかい節成さんよ？」

「お前とは何度も飯食っただろ、後だ後。」

文字通り手で払われた宗悟はハイハイといった調子で身を引く。誘いを受けた当の本人たるレミエルはこの提案を好ましく思っているようだ。

「きっさてんですか、いいですね！行きたいです！」

「なら決まりだな。宗悟、先帰っててくれ。」

再び手で払われた宗悟は、今度は何かと分かり切った様子だった。

「はいはい、お邪魔虫は早々に退散しますよっと。そんじゃな節成、レミエルちゃん。」

そそくさと教室を後にする宗悟。心の中で今度何か驕ってやろうと思った節成は、一拍置いてからレミエルを連れて教室を出るのであった。

――

喫茶店へと向かう道中、節成とレミエルは異様な光景を目の当たりにした。公園では小柄な少女が野鳥をまじまじと見つめている。それだけなら至って普通の光景なのだが、問題はその少女の姿が普通では無かった事である。服というよりはボディラインをなぞったスーツといった姿に加え、体のあちこちからプラグやらコードといった類の無機物を覗かせている。恐らく白の世界のアンドロイドなのだろう。しかも、更にこの光景を異様なものと昇華させているものがある。そのアンドロイドの少女を木の陰から隠れるように覗き見している人物がいるのだ。こちらも公園のアンドロイドと似た風貌だが、それよりも大人びているように見える。半ばストーカーじみているそのアンドロイドの行動に節成とレミエルは困惑していた。

「――なんでしょう、あれ。」

「ストーカーか？でも女の子を狙う女って構図がよく分からん。」

　理解の範疇を超えたその光景に二人は困惑するばかりだった。節成はレミエルを促して先を急ごうとしたが、その意に反してレミエルは節成を制止する。

「……あの子を狙ってるのなら、きっといけない人だと思うんです。」

「見た目の時点である意味既にいけない人だと思うんだが――いや待てレミエル！」

　節成の制止を聞かず、レミエルは彼の怪しいアンドロイドに向かい歩を進める。悪い事をしている者に対して注意をしようとしているのだろう。今までのレミエルからは

考えられない行動だった故に節成の対応が遅れたのだ。気付けばレミエルは怪しいアンドロイドのすぐ傍まで寄っていた。

「あ……あの！」

勇気を振り絞った調子でレミエルが話しかける。その声に反応し、振り返るアンドロイド。その表情は決して穏やかに感じ取れるものではなかった。

「何でございますか。」

「――ひっ!?」

真顔。アンドロイド故に敢えて表情を作っていないのだろうか。どちらにせよレミエルに敵意を向けていることは分かる。節成は急いでレミエルに駆け寄り、かばうようにレミエルの前に出てアンドロイドと体を向き合わせた。レミエルは怯えた様子で節成の後ろに隠れる、先ほどの威圧ですっかりやられてしまった様だ。

「悪いな、急に話しかけて。でもアンタ怪しいぞ。」

「怪しい？わたくしが？」

自分は正常だと思い込んでいるのだろう、取っている行動に対して何ら疑問を持っていないようだった。

「女の子を物陰から観察し続けてるなんて、どう見ても普通じゃないだろ。」

「……わたくしの行動原理を否定するのですか、貴方は。」

表情を変えるアンドロイド。今度はこちらを睨み付けてくる。
「セニアを見守り続けるのがわたくしの役目でございます。それを否定するのであれば――。」
まずい、と瞬間的に感じた。目の前のアンドロイドは節成に対して明確に殺意を向けている。先ほどの言葉でスイッチが入ってしまったのだろうか。何にせよ危険な状態であることは確かだ。レミエルをかばいつつ少しづつ後ずさる節成に、アンドロイドはゆっくりとにじり寄ってくる。
「〝人間〟とはいえ容赦は致しません。」
殺意が膨れ上がる。後ろのレミエルに逃走を指示しようとしたその瞬間、公園で野鳥と戯れていた少女型のアンドロイド――恐らく目の前のアンドロイドが〝セニア〟と呼んだ個体が野鳥を追いかけて公園を出ようとしていた。その気配を感じ取ったのか、目の前のアンドロイドが後ろを振り返る。公園を出ようとしている〝セニア〟を認め、それを追い始めようとするアンドロイド。最後にこちらを振り返り、言葉を吐き捨てた。
「――命拾いしましたね〝人間〟。」
力が抜け、その場にへたれ込む節成。とりあえずの危機は脱したようだ。
「ご、ごめんなさい。私のせいで……。」

「いや、こうなるとは思いもしなかったさ。レミエルのせいじゃない。」
　作り笑いで平静を装ってはるが、実際の所かなり恐怖していた。相手が機械である以上、本気でかかられたら本当に死に至りかねないし、先ほどのアンドロイドはその〝本気〟を出す勢いだった。深呼吸で心を落ち着かせる。
「――よし、行こう。」
　本来の目的である喫茶店に向かう。節成の空元気を感じ取ったレミエルの足取りは重かった。

――

「あれ、元気ないねー？」
　翌日。食堂で机に突っ伏している節成に美海が話しかける。あの後喫茶店で口にした紅茶の味も覚えていないほど、昨日の件が強烈だったのだ。レミエルはそんな節成を目の当たりにして終始あわあわしているばかりで、宗悟とはろくに話せていない。それほどまでに節成は疲れていた。
「おっ、美海ちゃんか。頼むよ、コイツに一発元気入れてくれ。朝からこんな調子なんだ。」
　宗悟が美海に頼み込む。それを快く引き受けた美海は、節成に対して何らかの行動を取ろうとしているのか、なぜか屈伸運動を始める。宗悟とレミエルは美海が何をしよう

としているのか理解できないでいたが、次の瞬間美海は予想外の行動を取った。
「いっくよおー！」
　掛け声と共に節成に飛び掛かる美海。その衝撃で節成の口から低い声がひねり出された。後ろから抱き着く形で節成の頭をグリグリと撫でまわす。その様子にレミエルは赤面し、宗悟は目を丸くしていた。
「おりゃおりゃあー、元気だせー！」
　食堂全体がざわつく。何やってんだあの子、またアイツか、などといった半分呆れが混じった声が聞こえてくる。そんな事を気にもせず、体を密着させ頭を撫で続ける美海。そんな美海の行動に限界を感じたのか、節成が突然飛び起きた。
「――だあぁぁぁ鬱陶しい！」
「あぅ！」
　飛び起きた反動で美海が床に尻もちをつく。その様子をみてレミエルは更にあわあわするばかりだったが、宗悟は歓声を上げる。痛そうに臀部をさする美海に、飛び起きた節成が詰め寄る。
「人がブルーな気分のときに何すんだオマエは！」
「だって元気入れてくれって頼まれたし、ソフィーナちゃんにも同じことしたら今みたいに飛び起きたし！」

頭を抱える節成。以前似た者同士とは言い合ったがここまでとはと、同じことをされたソフィーナに同情をしつつ、結果的にいつもの調子を取り戻す節成であった。
「何か馬鹿馬鹿しくなったわ……全く。」
「えへへ、結果オーライだね！」
節成を再起させることに成功した美海を称えるレミエルと宗悟に再び呆れると同時に、心の中に少しだけ感謝の言葉を思い浮かべる節成。そこでふと昨日の件を思い出す。
「——なあ美海。〟セニア〟って子知ってるか？」
彼の危険なアンドロイドに監視されていた〟セニア〟と呼ばれるアンドロイドが、節成には気にかかっていた。数々の生徒との関係を持つ美海なら知っているのではと思い立ち、質問をする節成。それに対し美海は二つ返事で答える。
「うん、知ってるよ！よく一緒に遊ぶんだ！」
よく一緒に遊ぶと聞いて、昨日のセニアを思い出す。あのように二人でただぼーっと野鳥を眺めるのだろうか。それはともかくといった感じで、節成は言葉を続ける。
「なら伝えておいてくれ、〟怪しいアンドロイドが着け狙ってた〟って。」
「怪しいアンドロイド……あぁ、多分それカレンちゃんの事だよ！」
一瞬美海の言葉が理解できなかったが、どうやら昨日殺されかけたあの危険なアンド

ロイド――カレンの事を美海は知っているらしい。
「あの、どういう事なんでしょうか？」
　事件の当事者でもあるレミエルがカレンについて美海に尋ねる。
「えっとね、カレンちゃんはセニアちゃんのお姉さんで、妹のセニアちゃんが大好きなの。暇があればずっとセニアちゃんの事を傍で見てて、セニアちゃんが一人で遊んでるときは陰で見てたりもしてるかな！」
　美海の証言で昨日の件が腑に落ちた。昨日のあれは、セニアが遊んでいるところを文字通り見守っていたのだ。ストーカー行為と思い込んでいたが、実際の所はそうではなかったらしい。
「――いや、あれはストーカーに見えるだろ普通。」
　つい言葉を零す節戒。あの構図を何も知らずに見てストーカーではないと判断できる人間を見てみたい。
「うん？何の話？」
「こっちの話。」
　つまりカレンのあの行動を阻害するという事が、カレンに〝セニアに危険が及ぶ〟と解釈されたらしい。
「つまりそのカレンちゃんって子はシスコンなんだな！」

宗悟が昨日の件も何も知らずに断言する。確かに大きく言えばそうなのだが、と再び頭を抱える節成。

「しすこん……って、なんですか？」

「レミエルは知らなくていい言葉だぞ。」

宗悟がこれ見よがしと説明をしようとしていたところを物理的に遮る節成。

「えっと、あまりよく分からないんですけど、つまりカレンさんはセニアさんを守ってたって事なんですか？」

「多分そうなんじゃやないかな！」

レミエルの疑問に美海が適当に答える。適当とはいえ、大きく見れば確かにその通りだ。その回答を聞き、レミエルは考え込む。カレンは只セニアを文字通り見守っていたに過ぎなかったのだ。結果的に自分がそれを阻害してしまった。これは反省すべきことなのではないか。そんなことを考えていたとき、美海のふとした発言が更にレミエルを悩ませるのであった。

「でもカレンちゃん、周りにどう思われても自分のしたい事をしてるんだもん。見習いたいなあ。……カレンちゃんらしいよね！」

「お前も十分好き勝手やってるだろ。」

節成は軽く美海に突っ込みを入れるが、レミエルは彼女の語る〟自分らしさ〟についい

る。
自分を押し込めるだけで、自分のやりたいことなんて一つも出来ないでいた。周りの事を気にしすぎて、自分など存在しないものだと思い込ませていたことさえあった。そんな自分も、青蘭島で生活をするようになってからは随分と変わることができた。それ故に思う。
「〝私らしい〟って、なんだろう。」
その声は、食堂の喧騒に紛れて誰の耳にも届かなかった。

――

その後、午後の授業が終了しいつものようにホームルームが始まる。冬木が教室に入ってくると同時に教室の喧騒が一気に収まった。
「さて、今日のホームルームだが一つ特殊な連絡事項がある。後日、高等部一年のレベルを向上させる目的で〝ブルーミングバトル　クラス対抗戦〟の実施が決定した。」
突然の告知に教室全体がざわめく。未だにブルーミングバトルはおろか、エクシードにさえ不慣れな生徒が多いこの時期の本格的な対抗戦は、学園の歴史を見ても前代未聞であった。そんな折のこの告知に、節成らもまた困惑していた。
「そんな、いきなり対抗戦だなんて！」
「私達、まだ殆どブルーミングバトルに慣れていないんですよ！」
流石にクラスの皆も思う所は同じらしく、冬木に抗議する者も少なくはなかった。

「分かっている！　お前らの低いレベルを向上させるためだと最初に言っただろうが！」
冬木の一喝でクラスが一気に静寂に包まれる。
「学園公認の対抗戦とはいえ、本気でやりあえとは流石に言わん、あくまで練習の一環だ。だが時期も時期だ、公平性も考え今回の対抗戦は全員参加とする！」
全員参加。その言葉に教室全体が再びざわめく。例年通りであれば一定期間が経ち、ある程度戦える生徒をクラス代表に選び対抗戦を行うらしいのだが、今回はその限りではない様だ。
ブルーミングバトルクラス対抗戦。避けられない戦いが節成とレミエルに迫っていた。

Ａｃｔ．８　自分らしさ

死神の鎌

「はぁぁ……。」
　二人のため息が重なり合う。担任の冬木が唐突に告げた〝ブルーミングバトルクラス対抗戦〟。とりあえず情報を集めようという事となり、宗悟を連れ三人で図書室を訪れた節成とレミエルだったが、その心境は暗いものだった。以前のブルーミングバトルの実践演習でリンクに失敗して以来、節成のみに限らずクラスの複数人と何度か練習はしたものの未だに一度たりともリンクに成功したことはない。その事実に節成は焦りを感じているのだが、突破口がどうあがいても見つからない。そんな中告げられた対抗戦、焦りが更に生まれないはずが無かった。レミエルにとってもそれは同じ事の様で、重なり合ったため息に顔を合わせ、再びのため息を二人して零した。
「おいおい、そんなんで本当に大丈夫なのかよ、対抗戦。」
　そんな二人の様子を見て、流石に心配したのか宗悟が声をかける。
「大丈夫に見えるか?」
「……悪りぃ。」
　節成が再びため息をつく。そんな節成を見かねたのか、レミエルがいくつか資料を

持ってきたようだ。図書室を訪れた本来の目的がすっかり頭から抜けていた節成はふと我に返る。

「そういやブルーミングバトルについて調べるんだったな。」

「忘れてたんですか、節成さんらしくもないですね……。」

気を取り直して資料からリンクに関して何かしらのヒントを探し始める節成ら三人。

暫く経ち、宗悟がそういえばと言わんばかりに話を切り出した。

「——クラス対抗戦って、時期的にはまだ早いだとか言ってなかったか？」

「は？——そういやそれっぽい事言ってたな。」

宗悟の疑問を聞き、先刻の冬木の言葉を思い出してみる。確かにそのようにも取れる様なことを言っていた気がする。つまり裏を返すと今年のクラス対抗戦は特例という事になるのだ。

「何でまた今年に限って例年よりも早く、しかも全員の総当たり戦なんかにしたんだろ？」

「技術向上の為だとか言ってたけど、まだ一学年の前半なのにそこまで急ぐ理由にならないような気がしないでもないな……。」

宗悟と節成がそんな話をしていると、レミエルが何か見つけたのか二人の会話に割って入ってくる。

「二人とも、この資料見てください。〝青蘭学園の歴史〟って項目です。」
どれどれと資料を覗く二人。そこには文字通り青蘭学園の歴史と共に、毎年開かれるブルーミングバトルの催しについての記述もあった。それによると、例年では新入生のブルーミングバトルクラス対抗戦は夏休みの終わった後、つまり秋頃に行われるとのことであった。現在は春から夏に季節が変わろうとする時期なので、相当な期間を前倒しての開催という事になる。
「――どうも不可解なんだよなぁ、気のせいかな。」
「上手くいっていないリンクを理由に陰謀論でも立ててるんじゃねぇのか？」
現実を見ろと宗悟に言われた気がして、それ以上この話題に口出しをするのは止めようと思った節成だった。

――

結局、図書室での情報収集では有益な物は得られず、その日はその場で解散となった。
冬木の宣言から図書室での情報収集と続いたため、辺りはすっかり暗くなっていた。その週の買い出しを済ませていない事に気づいた節成は、レミエルを寮に送り届ける役目を宗悟に任せ、一人商店街を訪れていた。買い出しと言ってもそこまで自炊をしているというわけではなく、基本的に冷凍食品を買い溜めしておくにとどまる。我ながら貧相な生活をしているなという自覚を節成は持っていた。ただ、学生という立場上あまり時

間を割けずにいるのだ。割り切るしかないなと、節成は自身の中でこの話題にけりをつけ、結局有益な物が得られなかったレミエルとのリンクについて考える。

節成がレミエルとのリンクを試みたのは二回。一度目は初のブルーミングバトルの実践演習、二度目はその後の自主的な練習だ。結果を見れば二度の挑戦双方で失敗をしている訳だが、少しの疑問点が節成の心に引っかかっていた。

まず一度目のリンク、初回故に仕方がないと自分に言い聞かせてはいたが、気を失っていた間に見た幻覚――と言い切っていいのかは分からないが、図らずも垣間見えたレミエルの過去らしきビジョン。冬木に相談はしたのだが、結局〝稀によくある〟等とどっちつかずの返答しか得られなかった。

そして二度目。リンクの回数を数えれば正確には二度目ではないのだが、特訓五日目のあの出来事だ。御影葵の助力もあり、リンク成功と思った矢先に起きた唐突なリンクの拒絶反応。こちらも冬木に〝そこまで行ったのになんで成功しなかったんだ〟と逆にどやされてしまった。

感覚は掴んでいた。しかし、リンクに成功しない。考えるうちに再び節成に焦りの感情が浮かび始め、自己問答を始める。対抗戦までに何をすればいい。練習をする。同じ結果になるだけだ。レミエルと話し合う。もうやったし結果は変わらなかった。では何を――。結局答えが出ないまま、帰路を進んでいく。

――唐突に何者かがすれ違いざまに言葉を投げかけた。
「そのまま進むと、死ぬわよ。」
「――え?・」
突然の事だったため、節成は意味を理解出来なかった。声の主を確かめようとその場に立ち止まり、自分が来た道を振り返ろうとする。次の瞬間、節成の背後を何かが猛烈な速度で通り過ぎていった。一瞬の出来事に言葉を失う節成。冷静に辺りを見回すと、そこは大きめの交差点で目の前の信号は赤く点灯していた。節成の身は既に車道へとはみ出しており、少し考えると先ほど通り抜けていた物体が大きめのトラックであった事が理解できた。考え事をする余り、前方不注意になっていたようだ。つまり、先ほどの投げかけ――いや、〟警告〟が無ければ今頃――
「死んでた……?・」
恐怖が後から襲い掛かってくる。思わず腰が抜け、その場にへたれこんでしまった。後ろを振り返り、今一度先ほどの声の主を探す節成。視線の先には恐らく先ほどの声の主と思われる人影があったが、程なくして夜の闇に消えていってしまった。最後に一つ、街灯に照らされ輝く〟鎌〟の光を残して。
――
「って事があったんだ。」

　翌日の朝、いつものように宗悟とレミエルに話す節成。とても死にかけた奴の話す事とは思えないという反応をする宗悟に反し、レミエルは本気で節成の身を案じていた。
「だ、大丈夫なんですか？　怪我とか、無いんですか？」
「大丈夫だって、安心しろよ。」
　自分の体を大げさに見せる節成。節成の話した事は真実で、実際怪我の一つも無かった。ただ、一歩間違えれば本当に死を迎えていたという事実に、節成は無理に明るくふるまわなければいつもの雰囲気を保てないでいた。そんな折、ホームルーム開始を知らせるチャイムと同時に冬木が教室に入ってくる。
「よし、全員揃ってるな。昨日の今日だが、ブルーミングバトルクラス対抗戦の対戦表が完成した。」
　クラスがどよめくが、それもそのはずである。昨日に開催を宣言し、その翌日の朝に既に対戦表が出来上がっているというのだ。本来であれば決定から暫く時間のかかる工程をすっ飛ばして対戦表の完成と宣言する。つまりそれはこの対抗戦が以前から既に早期開催として計画されていたことを示していた。
「出来レースって事か……。」
　奇しくも昨日の妄想が的中してしまった節成に嫌な予感が走る。具体的にはさっぱりわからないが、何かしら悪い方向に物事が進むような、そんな予感が節成にはあった。

「では早速だが対戦表を発表する、前部ブラックボードに注目しろ。」
青蘭学園では従来の黒板の代わりに、センサーを用いて文字を書くことのできる電子的な黒板を採用している。映像パネルを利用しているので普通の黒板として利用するのみならず、この様に資料を直接パネルに映すことも可能なのである。
その黒板に、このクラス――1―Bクラスの生徒と他クラスの生徒との組み合わせが立ち絵付きで公開されていく。その中に宗悟とはねるの姿があった。どうやらαドライバーとプログレスの組み合わせは、パートナーの申し出をしていない場合、ある程度実習を考慮されているらしい。節成はレミエルとのパートナーの申し出を以前正式に行った為、このクラス対抗戦でも組み合わせが固定される筈だ。対戦表も最後の方となり、漸く節成とレミエルの組み合わせが公開される。対戦相手は黒い衣装に身を包んだ生徒。黒の世界出身の生徒なのだろうか、所々にそれらしき装飾が見受けられる。
「――っ!」
節成は目を疑った。対戦相手のプログレスの手にしている獲物。それは〝鎌〟であった。まるで死神のそれを彷彿させる異形の鎌に、節成は見覚えがあった。昨晩、節成に対し警告の言葉を零した者。その去り際に見せた〝鎌〟の光。
「チェルノ・チェリッシュ――。」
レミエルがその鎌の持ち主の名を口にする。対戦の日時は一週間後。クラス対抗戦

のトリを飾る日時となっている。
天使と死神の対峙。——節成は息をのんだ。

Ａｃｔ．９　死神の鎌

死を招く者

対抗戦の組み合わせ発表を終え、静寂を取り戻した教室に節成ら三人の姿があった。次々と生徒が退室していく中、事を過剰なまでに深刻に捉えていた彼らはその場でいつものように話し合っていたのだった。
「まあ、あれだな。周りからしてみりゃなんであんなに深刻になってるんだって思われてそうだよな。」
宗悟が軽い口調で言って見せる。事実、対抗戦はあくまで学園行事の一環である。結果如何で今後に影響するわけでもなければ、αフィールドのない戦いの様に命に関わるものでもない。
「そりゃそうだよな。正直自分でもなんでここまで真剣になってるのか、分からなくなることもある。ただ――。」
レミエルの事を考えるとそうも言えない、と口に出すのを節成は直前になって留めた。とうの本人の前で口に出す言葉でもないし、また宗悟にどやされるとも思った。節成自身がレミエルに相当肩入れしていることの現れでもあるこの言葉は、いたずらに口に出すものではない。そう思った節成は結果的に口ごもってしまう。

「ただ、何ですか？」
レミエルが節成に尋ねる。間違っても先の答えを言う訳にいかない節成は、当然別の言葉でごまかすのだった。
「――やるからには力を出し切らないとな。」

――

その翌日、勝利を得るにはまず相手を知ることから、という結論に至った節成とレミエルはチェルノの事を知る人物を探しだした。宗悟はパートナーとなるはねるとの情報交換の為、ホームルームが終わって早々単身陸上部へと乗り込んでいったとの事だ。
「まあ、アイツらしいな。」
そう呟き、隣の席のレミエルへと目をやる。その表情は、どこか心ここにあらずといった調子であった。
「何考えてるんだ？」
「ふえっ!?え、ええと……チェルノさんの事、誰に聞けばいいのかなって……。」
鳩が豆鉄砲を食らったような表情を見せるレミエル。少々違和感を覚えた節成であったが、追及はしないでおく。
「そうだな……黒の世界出身なら、その手の事情通なんかいるとありがたいけど、思いつくか？」

レミエルに尋ねるも、彼女は顔をしかめ横に振る。そう簡単に思いつくはずがない、と感じ取った節成は、自身も候補を頭に思い浮かべる。認めたくはないが、真っ先に思い浮かんだのは美海だった。彼女の未知数の人脈であれば、あのチェルノとも面識を持っている可能性がある。だが節成にとって美海とは最も苦手な存在であった。親の都合で引っ越しが多い家庭だった事もあり、元々そこまで友人は多くなく、幼い頃はひっそりと学校生活を送っていた節成にとって、傍若無人に友人を生み出していく美海は眩しすぎたのだ。

「――ないな。」

美海を候補から外し、再び思考の海へと意識を走らせる。少し経ち、ある人物が節成の脳裏に思い浮かんだ。レミエルもほぼ同じタイミングで思い浮かんだらしく。お互いに顔を見合わせた。

「ソフィーナ！」

「ソフィーナさん！」

――

チェルノの情報をソフィーナから聞きだすべく、その捜索を開始した節成とレミエル。レミエルは校舎内、節成は校舎の外と、二手に分かれて探す事となった。

ソフィーナを探し、校舎内を歩くレミエル。放課後という事もあり、多くの生徒が廊

下を行き来している。
「ソフィーナさんがいそうなところといえば――。」
以前節成がソフィーナと訪れたという図書室へと歩を進めるレミエル。ふとどこかで見覚えのある人物とすれ違った。灰色の髪に黒い装束を身にまとった生徒。見ただけでどこか物々しさを覚えるその人物に、レミエルは思わず振り返る。その生徒もレミエルの事を知覚した様で、少しして立ち止まり、こちらを振り返った。
「あら、あんたが〝片翼の天使〟?」
「チェルノさん……。」
思いがけず本人と出くわしてしまったことへの驚きもあったが、チェルノから感じられるどこか不可思議な雰囲気にレミエルは圧倒されていた。
「対戦表で見たわ、あんたが私の相手なんですってね。」
「そ、そうみたいですね。」
余裕気なチェルノに対し、対峙しただけでたじろぐレミエル。そんな彼女の戸惑いを感じ取ったのか、含みを持った笑みを浮かべながらチェルノがレミエルに近づく。
「あたしの事嗅ぎまわってたみたいね、良い心がけだわ。対戦前の情報収集は基本だしね?」
早々に確信を突かれて、動揺が顔に出てしまう。チェルノはレミエルの様子から自分

が調べられているという事を見抜いたのだ。
「嗅ぎまわるなんて、そんなこと――。」
「隠さなくたっていいのよ、あんた達は至極当たり前の事をしているんだもの。あたしも、少しはあんた達のこと調べさせてもらったしね。」
調べられていた。その事実を知り、レミエルの動揺が焦りに変わる。事前の情報収集を、自分達だけでなく相手もしているという事まで頭が回らなかったのだ。
「〟レミエル。赤の世界出身の天使。片翼しかなく、それをコンプレックスに思っている。〟――ってね。あんたのアルドラの事も知ってるわよ、〟日向節成〟って。」
チェルノは淡々とレミエルらの情報を語ってみせた。改めて自分のふがいなさを突き付けられたようで、レミエルの目尻に少しづつ涙が浮かび始める。
「あんた達、まだリンクにも成功してないんですってね。お笑いだわ。」
「――！」
一番知られたくない事が、他ならぬチェルノの口から吐き出された所でレミエルの足から力が抜けていった。膝から崩れ落ちるレミエルに対し、チェルノは見下す形で言葉を続ける。
「まあ、あたしがここまで知っててあんたらが何も知らないんじゃ可哀想だし、少しくらいはあたしのこと教えてあげるわ。その状態でどこまで理解できるか分かんないけど

ね。」
　チェルノは、レミエルが最早彼女に対し意識を完全に向けられていないと分かり切ったうえで自らの情報を明かそうというのだ。ほぼ意味を成さないその行動にすら気付くことができない程、レミエルの心は痛めつけられていた。
「あたしはね、死相が見えるの。簡単に言えば、誰がいつ死ぬか分かるってこと。この力で――っと、これは言っちゃいけないんだった。」
　淡々と自らの能力を明かしていくチェルノ。そんなことを知られても戦いになんの影響もない、そんなことを知っていてもあんたは勝てない、と言われているようでレミエルの心に敗北感が満ちていく。更に、その後に続いたチェルノの言葉がレミエルの心を一層激しく揺さぶる事となった。
「だからこんな事も分かるのよ。あんたのアルドラ――死ぬわよ。」

――

「おっ、レミエル！こっちだ！」
　校舎から出てきたレミエルに居場所を知らせるために大振りに手を動かす節成。レミエルと二手に分かれて暫くして、正門前のベンチで本を読むソフィーナを見つけた節成は、ある程度の情報を引き出すことに成功していた。そんな節成の元にレミエルは力なく近づく。その様子を見た節成は、レミエルに疑問の言葉を投げかける。

「レミエル、何かあったのか？」
「節成さん……。」
　レミエルは、チェルノ本人に出会った事、自分たちの情報が知られていた事、チェルノが自分の能力について語った事を節成に伝える。ただ、〟節成が死ぬ〟という事だけは口に出す事が出来なかった。あの後冷静に考えて、真相が定かでないという事もあるが、どうにも本人にその様な事を口にすることができなかった。
「そうか……俺らの事も流石に知られてるよな。」
「これで情報戦のアドバンテージが消えたわね。」
　節成の傍らのソフィーナが会話に参加する。既にいくらか節成と情報交換を交わしたようで、先ほどのレミエルの言葉に対して、いくらか頷く様子もあった。
「これでさっきの噂が本当の事だって分かったわね。」
「ああ。〟チェルノは死相が見える〟ってやつだな。これが対戦にどう関わってくるかだ。」
　情報の照らし合わせが終わり、今度はそこから取れる対策の議論へと移ったが、その成果は思わしくなかった。なにせ、死相が見える事がどの様に活かされるかが不明瞭だ。更に、自分らがリンクに成功したことがないという情報まで知られているとなれば、対策は難しいという結論になってしまう。

「こりゃ、根本的な問題を解決するしかないかな。」
「根本的な問題、ですか？」
「簡単よ、リンクを成功させればいいの。そうすれば貴女の能力も分かるし、そうなれば対策もいくらか取れるかもしれないわ。」
どちらにせよ、今のままでは勝ち目がない。対抗戦に勝つためには今まで失敗続きだったリンクの成功に掛かってくる。そのような結論に至った節成とレミエルは、原点回帰を余儀なくされた。
「結局の所、対抗戦までの間に特訓するしかないか。」
そう呟く節成に対し、レミエルは同意の眼差しを向ける。そんな中、ソフィーナの口から二人の予想しなかった言葉が発せられた。
「ここまで関わってしまったのだし、折角だから私も協力するわ。」
「えっ……？良いんですか、ソフィーナさん？」
驚きの色を隠せないレミエルに、ソフィーナが呆れたとも受け取れる口調で語る。
「私が助言しておいて負けたら、私の面目が立たないじゃない。それと、勘違いしないで。別に貴女達に肩入れするわけじゃないんだからね。」
そんなソフィーナの言葉に節成はばれない様に笑みを浮かべる。ソフィーナの実は世話焼きな性格を見抜いていた節成は、結果的にこうなるのではと内心思っていたの

だ。
対抗戦までおよそひと月。レミエル達の戦いが、動き出そうとしていた。
――
「ええ、レミエルと接触したわ。――わかったわ、その通りに。」
月が昇る夜、何者かと言葉を交わすチェルノ。闇に紛れ、何者と会話しているかは見て取れない。数分と満たないうちに会話を終え、チェルノは闇夜の月を眺める。そんな彼女の口から、言葉が零れた。
「さあ――あたしに勝って、運命を変えて見せなさい。〝片翼の天使〟――。」

Ａｃｔ．１０　死を招く者

対峙

鳴り響く剣戟の音。湧き上がる歓声。今、青蘭学園は高等部一学年によるブルーミングバトルクラス対抗戦の只中にある。対抗戦の時期になると、毎年各学年の生徒たちがその戦いを見物に来、学園側が図らずもある種の見せ物の様になってしまっている。学園側もそれを良しとしているようで、生徒の見物を黙認している。そんな習慣もあり、今年の対抗戦も多くの生徒の熱気に包まれていた。

そんな中、プログレスの戦闘方の研究も兼ねて戦いを見物していた節成とレミエルの元に先ほど試合を終えた宗悟が詰め寄ってきた。

「よぉ節成！お勉強かい？」

「宗悟か、まあそんなところ。お前こそ試合お疲れさん、なかなか良かったじゃん。」

「お褒めにあずかり光栄です。……なんてな、ははは！」

陽気に会話を交わす二人。つい先ほどまで宗悟とそのパートナーであるはねるの試合が行われていた。相手は模擬戦での相手にもなったユリヤ。模擬戦では半ば自滅の様な結果に終わってしまっただけあり、今回は見るからに堅実な戦いをしていた。ユリヤの生み出す氷塊を上手く避け、時には正面から破壊してユリヤに突貫していったの

だ。勿論無傷と言う訳にはいかなかったようで、宗悟がダメージを肩代わりする場面もあった。しかしそのダメージにもよく耐え、リベンジマッチを制する結果となった。

「レミエルちゃんも熱心にお勉強してるねぇ。具合はどうよ?」

宗悟が陽気な調子のままレミエルに話しかける。しかしレミエルの目は繰り広げられる剣戟に取られているようで、宗悟の言葉は耳に入っていない様だった。現在彼女らの目の前では日向美海と御影葵による試合が行われている。お互いに剣をエクシードで生み出し、一進一退の攻防が繰り広げられている。

「止めておきなさい、今レミエルを刺激するのは無粋ってものよ。」

そんな言葉と共にソフィーナが宗悟を制する。いつの間にか節成らの見学ポジションに来ていたようで、二の腕辺りをつねり上げ宗悟の言葉の先を物理的に遮ぎった。

「いでででで! わかったから勘弁してくれ!」

「わかったなら良し。」

ソフィーナのつねり上げから解放される宗悟。そんなやり取りも気に留めず、レミエルはただ目の前を見つめている。まるでそんな些末な事に付き合ってはいられないと言っているようだった。

「レミエル……。」

節成はそんなレミエルの様子を、ただ見守っていた。

――――

対抗戦は佳境を迎えていた。試合のほとんどが終了し、残すはあと二試合。節成とレミエルは試合に備え、特設の控え室で準備をしていた。控え室といっても簡素なもので、グラウンド近くの教室をそのまま流用したものである。

「緊張してるのか……って聞くまでもないか、当たり前だよな。」

「――はい。」

節成らはこのひと月、特訓を欠かさず行ってきた。ソフィーナの協力もあり、一通りの攻撃への対処はある程度こなせるまでに成長していた。しかし、一番の問題であるリンクに関しては未だに解決に至っていなかった。レミエルは恐らくその部分を不安に思っているのだろう。

「大丈夫だって。リンクができなくてもαフィールド下なら直接のダメージは無いんだ、思いっきりやれるだろ?」

「でもそれじゃあ節成さんの負担が……。」

レミエルはこの状況でも自分を心配してくれている。しかしその気遣いは戦闘において隙を生み出すものだと、ソフィーナから学んだ。パートナーを心から信頼し、全てを預ける事ができれば自ずと全力は出せるものだ、とソフィーナは語っていた。

「……いいか、レミエル。俺は何があってもレミエルの事を信じてる。だからレミエル、

お前も俺の事を信じていてくれ。」
「節成さん……。」
　ふっと、レミエルの表情から不安が和らいだ様な気がした。少し経ち、レミエルが思い出したかのようにいつも持ち歩いている小物入れからある物を取り出した。花が添えられた、白いヘアピン。以前節成がレミエルに贈ったものだ。
「前にプレゼントしたヘアピン、持ってきてたんだな。」
「はい。実はなんだか身に着けるのがもったいなくて、今まで大切にしまってたんです。でも、今は少しでも――」
　レミエルからその先の言葉が発せられることは無かった。直前になって思いとどまったのか、口をつぐんでしまった。
「……レミエル？」
「えっと、青の世界ではこういう事を〝ゲンカツギ〟って言うんですよね、そういう物に頼るのもいいかなって思ったんです。」
　どこかはぐらかされた様な気がしたが、深く考えずに節成は頷き返す。レミエルが白いヘアピンを前髪に留めた丁度その時、試合開始予告のアナウンスが鳴り響いた。その場の空気が一気に引き締まるのを節成は感じた。二人は覚悟を決めた表情で向かい合い、戦いの場へと身を投じていった。

遂に迎えた対抗戦最終試合、生徒の数もまばらになってきている。しかし、試合開始前の会場は少しどよめいていた。定石どおりにαドライバーとプログレスのコンビで参加している節成らの前には、対戦相手のチェルノがαドライバーを連れずに一人で立っていたのだ。αドライバーがいないという事は、リンクもαフィールドも無い状況下で戦う事を意味しており、非常に不利であると言える。ルール上必ずしもαドライバーが必要と定められている訳ではないが、基本的に二人一組でのエントリーで対抗戦が進行していた事もあり、最後の最後で特異な光景が広がる事となった。

「チェルノさん、どうして……。」

「わからない？あんたなんて、アルドラがいなくても取るに足らない相手だってことよ。」

挑発されている、と感じた節成はレミエルに声をかける。

「気にするな、それだけ有利な状況で戦えるとも取れる。落ち着いて行くんだ。」

「……わかってます。」

そんなやり取りをしている二人と一人の間に、神通冬木が割って入ってくる。試合開始直前となり、節成はαドライバーが立つスペースへと下がる。レミエルは足元に置いてあった杖を手に取り、感触を確かめる。レミエルが赤の世界からこちらに来たときに

持ち込んだ杖らしく、先端に金色の装飾が施されており、その様子はどこか地球のファンタジー小説に登場するような物に思えた。

「二組とも揃ったな。片方は一人だが、まぁいい。審判は私が勤めることになった、お互いに全力を出して戦えよ。」

いつもと変わらぬその口調が、この瞬間においては酷く緊張を誘うものに聞こえる。それはレミエルにとっても同じようで、背中越しでも緊張している事がわかる。チェルノと対峙するレミエル。その瞬間は、冬木の凛とした声で迎えられた。

「試合開始!」

戦端が開かれると共に、節成はαフィールドを展開、レミエルとのリンクを試みる。今まで失敗続きではあるが、本番で成功する可能性は捨てきれなかった。レミエルも思っていることは同じ様で、リンクを試みる用意は出来ているように見えた。

「エクシード・リンク!」

レミエルと精神を同調させる。暗闇の中を自分の意識だけが光り輝くレミエルのそれに向かって進んでいく感覚。しかし節成の意識が光に触れた途端に、以前と同じ眩暈に襲われる。それを感じ取った節成は慌ててリンクを切断するしかなかった。辛うじて模擬戦の様に意識を失う事態を免れたが、リンクを直前になって切断した事でレミエルにも少々の負担があったようだ。頭に手を添え、痛みに耐えているように見える。

「――茶番は終わった？」
「うっ……！」
結果がわかり切っていた様なチェルノの言葉にレミエルが怯む。リンクの失敗。これによりチェルノに対するアドバンテージが半減したといっても過言ではなかった。
「それじゃあ――っ！」
「――っ、レミエル！」
チェルノの鎌が下から切り上げる形でレミエルを襲う。節成の声で我を思い出し、咄嗟に杖で防御の姿勢を取ろうとしたレミエルだったが、寸での所で間に合わず、直撃する。αフィールドに鎌が干渉し、激しい衝撃をレミエルに与えると同時に節成の体に鈍い痛みを走らせる。
「きゃぁ!?」
「グッ――!?」
衝撃によりレミエルは後ろに大きく弾き飛び、地面に叩き付けられた。節成を二度目の痛みが襲う。αフィールドに守られた為ダメージ自体は無いものの、衝撃で苦しむレミエル。よろめきながら立ち上がるレミエルにチェルノは追撃をかける。
「休んでいる暇なんてないわよ！」
「くっ！」

縦に横に、鎌を振りレミエルを追い詰めるチェルノ。対するレミエルは寸での所でそれらを回避する。何とか距離を取り体制を立て直そうとするレミエルだが、チェルノの連撃がそれを許さない。
「まずいわね。ああも攻撃を続けられたら、いずれ……。」
試合を眺めていたソフィーナが呟く。このひと月あまりの特訓で、ソフィーナはレミエルに相手の攻撃の避け方を可能な限り教えてきた。しかし今レミエルが受けている攻撃の速度、回数は特訓のそれを大きく上回っている。現状レミエルは対応出来てはいるが、いずれチェルノの攻撃についていけなくなるだろう。
「あぁ。それにあんなに動かされたら、体力もやばいんじゃないか？レミエル、俺みたいにスタミナあるほうじゃないし……。」
「そうね、このままじゃ危ないわ。」
宗悟の言葉に目線を動かさず頷くソフィーナ。客観的に見てもレミエルの劣勢は明らかなものとなっていた。
暫くチェルノの猛攻は続き、レミエルにも小さな被弾が目立つようになっていった。そんなレミエルの脳裏に〝節成の死〟という単語がフラッシュバックする。この試合に負けたら節成を、大切な人を失ってしまう。そんなレミエルの焦りを見抜いたのか、チェルノが大振りの攻撃を仕掛ける。レミエルは反射的に杖で防ごうとするが、それは

悪手であった。

「待てレミエル!·それは――!·」

節成の叫びも虚しく、チェルノの大振りの攻撃をレミエルは杖で防ぐ。しかし体力が残り少ないレミエルにとってその重みは決して耐えられるものではなく、小さな悲鳴と共に体制を崩してしまう。結果急所がガラ空きになる形となり、チェルノに手痛い攻撃を許す事となった。

「がッ――」

チェルノの鋭い蹴りがレミエルに突き刺さる。レミエルの口から無理やり空気が吐き出される音が漏れる。αフィールドによる衝撃がレミエルの腹部を襲ったのだ。節成へのダメージもその例外ではなく、腹部を直接鈍器で殴りつけられた様な痛みが襲い掛かる。今までのダメージが蓄積していた節成を襲ったその痛みは、彼の意識を奪うに値するものであった。

「ッ――」

節成の意識が闇に沈もうとする。眼前には、衝撃に耐えかねその場にうずくまるレミエルの姿があった。

目に涙を蓄え、衝撃を受けた腹部を抱えるレミエル。節成の意識は既に風前の灯ともいえ、レミエルは体勢的にチェルノから見下される形になり、傍から見れば決着といっ

てもおかしくはない状況だ。観戦していた生徒たちの中にも、決着と判断し帰路に付くものも現れ出した。宗悟とソフィーナが今にも駆け寄りそうな様子でこちらを見ている。薄れゆく意識の中、レミエルはチェルノの声を聞いた。
「そんなものなの、あんたの力は。正直拍子抜けだわ。」
拍子抜け。元々、力を期待される方が間違いではないか。ふと、目の前に白いヘアピンが落ちていることに気付く。ゲンカツギも意味が無かったなぁ、と言葉を浮かべ、レミエルは闇の中にその意識を沈めていった。

――

暗い。どこだろう。
何処とも知れない道をただひたすらに歩く。寒く、体が冷たい。この道に終わりはあるのか、そもそもどうして歩いているのか、そんな事を考えても意味は無く、ただ闇に呑まれそうなその道を歩くしかなかった。
何処からか声が聞こえる。その声には聞き覚えがあった。昔の事だ、よくこんな言葉を浴びせられていた。
――何でお前なんかがここにいるの！
――穢れた天使め！
そうだ、穢れている。所詮〝片翼〟の自分には天使を名乗る資格は無い。終わりのな

い暗闇の中、レミエルは力尽きその場に倒れ込む。昔から思っていた、自分の様な穢れた天使は、いっそ――

――俺がレミエルの〝翼〟になる。いつか空を飛べるように、俺が片方の翼になる。

声が響く。どこか聞き慣れた、温かみのある声。

――もう悲しい思いはさせない。……だから！

倒れ伏した先に、光輝くものがあることに気付く。暗闇をかき消す程のまばゆい光に目を細める。

――これ、プレゼントなんだ。さっき見つけたやつなんだが。

花が添えられた白いヘアピン。そういえばさっき落としてしまったな。――拾わなくちゃ。

まばゆい光に手を差し伸べると、さっきまで凍えたように冷たかった体がほんのりと温かくなってくるのを感じた。

――何があっても、俺はレミエルを信じてる。

信じる。そう言えば、最後に他人を信じたのはいつの事だっただろう、思い出せない。

……ああ、そうか。

酷い話だ。信じると誓いを立てられた相手を、自分自身が信じられていなかった。心のどこかで、きっとまた裏切られると思っていた。

涙が零れる。あの時のちょこれいと、美味しかったなぁ。でぇとに誘ってくれて、嬉しかったなぁ。こんな私を、信じてくれて――

――だからレミエル、お前も俺の事を――

信じたい。そう思った。こんな自分を信じれくてた人。何も無かった私に、勇気をくれた人。私も――

「私も信じたい。あの人を――節成さんを信じたい！」

ずっと出なかった声が吐き出され、目の前で光り輝くヘアピンを掴み取る。その瞬間、凍え切った体を上塗りするほどの温かさと安心感に自身が包まれていくのを知覚した。

――

闇に呑まれそうな意識を何とか引き止め、目の前でうずくまるレミエルを見つめる節成。これ以上戦っても勝算は薄い。レミエルを苦しませるだけだ。それならばいっそのこと――

「……ここまでか。」

そう呟いた瞬間、節成は自分の意識が何かと繋がったような感覚を覚えた。体に温かさが流れ込んでくる。ハッと目を見開き顔を上げと、そこには驚いた様な表情を浮かべ後ずさるチェルノの姿があった。

力を入れ、少しづつ立ち上がるレミエル。うっすらと開けた左目には、金色の十字架が宿っていた。

Ａｃｔ．１１　対峙